青鞜

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜　第二年第十二號目次

わが影（短歌）……三ヶ島葭
東北風（翻譯）……瀬沼夏葉譯
近代人の告白（翻譯）……野上彌生譯
髪（小説）……杉本正生
痲醉劑（小説）……小林歌津
お染久松（短歌）……原田琴
メルストロエム（翻譯）……らいてう譯
コルシカの旅（翻譯）……榊櫻譯
蔦の帶（小品）……あきら
青鞜社詠草……同人
初戀（小説）……藤岡一枝
日記より……野枝
さよなら……皐月
編輯室より……同人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わが影——三ケ島葭

死すべきか求むべきかと惑ひたる身もてふた
たびのがれんとせし

のがるるはつひに危くみづからを放つは已に
寂しかりけり

まのあたりしら玉まろぶ危さよはた君ならで
たすくるもなし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戀來たるこは暗なるを如何せんよそには見じと待ちけるものを

戀をして戀を知らざりうつし世の罪か前世の假の掟か

おのれにも君にもあらず戀はただ時にあるかと惑ふたゆさよ

この戀はここに起りてここに盡く刹那に醉ひてたまゆらに醒む

女にて戀をする日の破りやうそれのみさきにならひたるわれ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

君により統べんとしたるわが世こそ流轉に終
れ渾沌にをれ
と思へば我もわが世もあらぬなりわが影見て
は死に走るわれ
君にさめ君に醉ふなり萬人の呼ばるる如く我
呼ばれつつ
呼びたまへ君に投げたるみづからのうつろに
ありて苦悶する身を
我も呼ぶたがへず我に來よと待つ心のほかの
寂しさにゐて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

この場すらつくろひがたしみづからをなのらで君を呼べば窮まる

戀とのみ言はまほしかり悲しくもまことに戀を知らぬ身なれば

見しをもてはじめて來よと呼びえたるしどけなさにぞ涙流るる

戀をこそ我とは思へこの我らわれらはつひにわれらなるかな

ふと知りぬ君我なるの斷末魔愛は苛酷にひどしきものと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

君は我我君なるの夢のまにうらぎらるべきあはれなる人

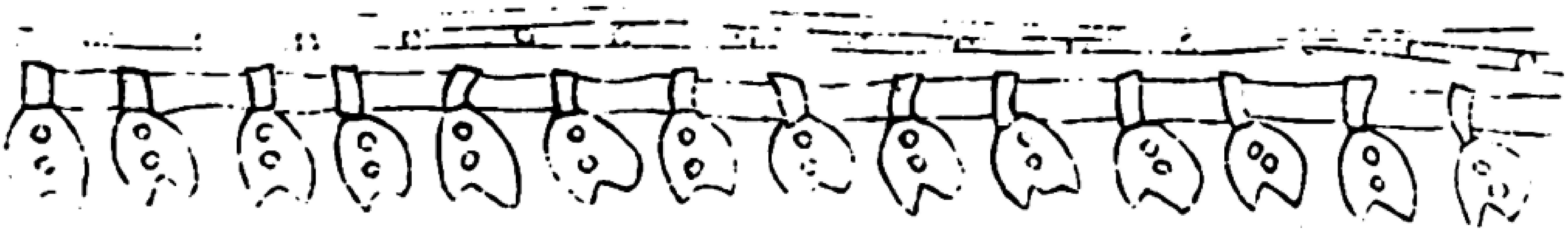
破りしか君がまぼろしそれならでたのむものなきわが身なりしを

みづからを疑ふ身こそ悲しけれ神を疑ふ君のかたへに

きはめたることをも更にさりいでて泣くこと多しはしたなき身は

抱擁か離別かここにさらばてふ心二つを如何見るべき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



君去りて我またあらず一すぢの寂しさここに
殘りて震ふ

君もまたかへりみざるや我もまたこの世に於
けるかりそめのもの

我時に我ならざるをおぼゆさも悲しからずや
戀は戀なり

代りうべき我にはあらじ君が身の替が捨てお
く缺陥にだに

東北風―ブヂシチェフ―

東北風、この土地では之を「ボラ」と云つてゐる猛烈なる暴風は、凄じく荒れ狂つて、山より吹下して來る。枳殼の藪の繁みは、氣の違つた女のやうに悲しげに唸つては泣く、時には野牛の荒れ狂つたやうにも怒號する、吹き荒む風に氣温も下つて寒い位。濃い碧色を湛えた海は、眼も眩くばかりの灰色の斷崖絕壁の下に、今日は暗い紫紺色と變つて、細かい、白い銀の飛沫をしう／＼と立てゝゐる。

見渡す遠くの海面には、風のまに／＼水烟が立つては消えてゐる、直ぐ傍の斷崖の下には透明る水の色、何となく何かを含んで怒つてゐるかのやうに、動かず、騷かず、靜に澄んで、僅に小波の紋を描いてゐる。見る所、海は此の風を憎んでゐるのであらう、此のいつも浪を心行く計り其絕壁に打寄せては、愉快に遊び戯るゝ樂しさを奪ふ所の、この東北風をひどく恨んでゐるかのやうで。水はぢつとして跳りもせず、たゞ折々しう／＼と音を立てゝ、蛇のやうに蜒つては行くかと思ふと、又忽に痙攣を引起したかのやうに、びくびくと顫えて動く。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此の風にも拘らず、小使のゲォルギイは、朝から主人コローボフの別莊に、海に沿ふた斷崖の上に垣根を編んで繞らしてゐる。之を見てゐた主人のコローボフは、愉快さうに、短く刈られた半白の髭を、綺麗に洗つた艶々しい手で捻りながら、口笛を吹いて、如何にも滿足の面色で、我が所有の總てを眴してゐた。家は左程に大きくない、屋根の平らかなマウリタン式で、臺所はざら／＼した石造の離れになつゐる、冷たい、甘い水の湧く井戸には矢張石の圓形の井戸側が繞されて、周圍はつい近頃に植へられた計りの若木の庭園。

庭内のいろ／＼の若木は、コローボフの趣向の通りに、植木屋が植付けたもので、其處には今はまだひよろ／＼した細い幹の、葉も淺綠ながら、櫻、梨、杏、李、白いアカチヤ、の花、優しげな、含羞草、種々雜多な薔薇の種類が取雜ぜられてゐる。やがては皆此の南方の暖き日影にはぐくまれて、繁り、匂ひ、咲き亂れて、美しい庭となるであらう。彼は五年前に此所に土地を買つて以來、毎年夏には來つて、此所を自分の好みの通りの別莊に經營した。而して時には徒然にまかせて、小使のゲォルキイの娘の、今年僅に十七歲の少女で、マリアンカと云ふのに戲れて機嫌を取つてゐた。彼の家族等は此所よりは遠きバウロフスクと云ふ市の、腐敗した空氣の、夏も沼の泥臭い匂のするやうな處に住んでゐた。

『此度來年の夏には連れて來やう此處へ、妻や子供等を。たゞあの崖へはよく圍をしなけ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りやならん』

と、コローボフは考へた。

『うむ、マリアンカ?』と、彼は彼女のことを思ひ出して微笑する、而してグオルキイの肩を叩いて云つた。

『ねえ、來年の夏には妻や、子供等を連れて來るよ、だが崖にはよく圍をしなけりや危い、それにまだ室内もう少し修繕をしなけりや可かん。』

グオルギイは筋太な手で苦もなく刺のある針金を黏接つて、崖際に垣根を手早に拵へてゐる。

『左樣で御座ります旦那樣、女房や子供てものは、可いもんで御座いやすなあ!』と、グオルギイは其の野牛の角のやうな髭を風に吹靡かせながら云つた。

其時枳殼の蔭影でサモワルの灰を掃除してゐたマリアンカは、ふと話を聞き付けて、憮然として、恐しい眼をして此方を睨み付けた。

『妻を連れて來るつて、何だ、人を這麼に大騷ぎしながら、えゝ畜生が!でなけりや、それまでにこの私を棄てゝ了ふてんだらう、人を、えゝまるで木偶人形だと思つて、玩具にしやうてえのだらう。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼女の暗い、底知れぬ秘密を有つてゐるやうな黒い眼は、ぱつと閃いて恨に燃えた。

「妻でも、家でも、酒でもこりや皆悅でさ！」と、ゲオルギイは云つた。

彼の髪は白つぽい茶褐色で、其瞬眼は黑く、白眼が酷く青色がゝつて、全く其の肩と云ひ、この眼と云ひ、彼は野牛をそつくり、其儘とも云ふべきであるが、たゞ背中だけが割合に少し優しい。

彼は如何なる人種に屬するや、其容貌骨骼に於て、之を鑑別することは難い。これは彼自身すらも何の種族に屬するかを知らぬのである。さて此の海岸の最も天然の風景に富んだこの一部分の場所に、初めチエルケス種族が他に移住して了つた後、すぐ來たものはエストと、ギリシヤの兩種族であつた。斯くて時の移るにつれて、兩種族は全く反對の人種なるにも拘らず、だん〳〵と打雜つて、爰に一種奇妙な、獨特な、力の強い、決心の早い、其上に狡猾な種族が出來上つた。

五年前、コローボフは此の地に來て、ゲオルギイを雇入れ、月々十二圓の給金と、臺所の室とを遣つて、一年中別莊の留主番を爲せることにした。而して五、六、七、八、の四ケ月間は、更に主人の用事を何から何まで殘らず爲なければならないことにした。彼も若い時分には矢張此地で皆人が爲るやうな密輸入をする者であつたのだけれど、跛(ぴつこ)になつて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

から今はもうこの危險な商買を止めて地道に歸つて、眞摯な別莊番となつたのである。

『俺こそは眞の正直な別莊番だ！』と、彼は自分のことを前に矢張『俺こそは眞の正直な盜賊だ、誰か若し出來るなら捉へて見ろ！』と、云つてゐた時のやうな調子で、毛だらけな胸を叩きながら自慢して云つてゐる。

ふとコローボフは庭の枳殼の藪影からマリアンカの紺靑色のスカートを見て、俄に眼を細めて微笑する。

彼は彼得堡の自分の勤めてゐるお役所のことを思ひ出した、それに又續いて、都の生活のいろ〳〵と細い、複雜なことゞもを思ひ泛べる。

中食までに彼は一度海水浴を取らうと、其處にゲオルギイを殘して、自分は一人右の方の、左右に折り曲つた小逕によつて、氣を注けながら坂を下り、だん〳〵と絕壁の下なる海に近づいた。緩りと着物を脫ぎ初める。斷崖は海面より高く拔くこと三十間で、流石の暴風も此の絕壁の下、二十間許りの距離には吹き當てず、此所ばかりは海は靜に穩で、たゞ遙か向ふの沖の方へ狂つて吹寄せる、惡魔のやうな怒號と、飛沫とを見る計りであつた。

コローボフは着物を脫いで、裸體のまゝ兩手を上下して、些と體操をする、さうして直に海に飛込んだ。見るかぎり渺々たる濃い紫紺色の海、灰色の岩の高い絕壁、謂はうやうな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く彼に快よかつた。遲歸りの二人の女の避暑客が、一人のは黃色い傘、一人のは藤色ので、絕壁の直ぐ下を、ぶら〳〵と步きながら通る。コローボフは三度水を浴びた、急にさつぱりして、生返つたように、身體中の血汐は爽に流れ、青春の折の甘き戀にあこがれた時代のやうな氣分で、わけもなく恍惚として、有丈の聲で叫びたく、咽喉も裂けん計りに、暴風の聲をさへ打消す程に彼は叫んだ。

『おーい、愉快だ！』

彼はもう一度水に入つた。而して平手に濡てる其腹を打ちながら、

『うッふ、愉快だ！』

二人の浴客は互に顏を見合はせて笑つた。

『水の溫度がまあ十三度ですよ』と、一人の女が他のに云つた。

水浴を終つて、體がふわ〳〵と輕くなつた彼は、まるで餓えた狼のやうな食氣を以て石の塀で風の避けられた屋根のあるウェランダで中食した。ギリシャ料理の小魚や、小羊の肉、酒は土地ので、色の薄薔薇な、値の安い葡萄酒、酒の肴には脂肪の酷い肉の切身、それと酒とを一口混に、食べては飮む。傍には美しい黑眼のマリアンカが含羞草の若木のやうな、なよやかに、細い艶な姿で、彼の給事に立つてゐた。海と、太陽とで、若さと氣力

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

こを潮のやうに漲らせたコローボフは、此の優しき若木の枝を手折りたく、引き斷りたく、揉み捲つて、たとひ一時でも、後は擲げて棄るにもせよ、たゞ其の香を嗅いで嗅いで、飽までも嗅ぎ盡したく、もう矢も楯も堪らなくなつた。彼の眼は赫と怒つたやうに輝いて、顔はさつと赤くなる。矢庭に彼は手を伸してマリアンカを自分に引寄せた。

『なあ、いゝもんさ、世の中は！』と、彼は一層近く娘を引寄せて云つた。

恰も今日は彼の石の上に、此の言が植付けられたのかと思ふやうだ。

マリアンカは身をぐつと屈めた。彼の手を振り離さうとするのでもなく、又其の手に絡まらうとするのでもなく、たゞ徒にコローボフをあせらせ、身を打顫はすまでに彼の感情を昂めさせて、彼女は其の細い、小さい、貂のやうな鋭さうな綺麗な歯を現して、眼に喜の色を見せた。

『ほんとうに可いわね、私達！　可いつたら仕様がないわ』と、マリアンカは云ふ。

コローボフは彼女の肩へ手を伸してキット抱き締めながら、強く其唇に接吻する。

彼女はするくと鰻のやうに彼の手から拔け出して、からくと笑ひ、淺黒い足と、綠色の上靴とをちらりと見せながら、ウクランダの石の床をばたくと踏み鳴らして逃げる。

『お出よ、今夜、あ？』コローボフは賴むやうに云ふ。

彼の眼は輝いて、手はだるく、胸先が苦しく咽喉が詰る。マリアンカは笑つてゐる。

『な、可いか、お出よ、こら！ 此度は俺を騙さないでな、いゝか、ほんとうにいゝ娘だお前は、いゝか、此度屹度騙しちや可かんよ、もう隨分俺からいろ／＼無心をしたぢやないか、欲しいものを、それでもまだ俺のことを何とも思つては呉れんのかい、お前は……』

マリアンカは肩を搖つて、酷く笑ふ。

『何でもお云ひ、好きなものを遣らうさ、だからお出よ、いゝか、あ、騙しちや可かんよ、又先のやうに、いゝか、おい！』と、彼は肥滿した腹の上に手を重ねて、騙し、賺し、慫う云つた。

マリアンカの大きい眼は眞面目になつた。

『あら、些と待つて頂戴！』と、マリアンカは顏色を少し變へて、小聲で、指を口に當てながら云つた。『第一に私騙しやしないのよ、そりや父が邪魔をするんですもの……』

『何時でもか？』

『えゝ、何時でも父が邪魔をするんですわ、さうして又第二にはね、あのね、肩掛がまだ二枚欲しいの、そらあの絹の紅の豆絞りのをね、私ほんとうに欲しくて仕樣がないわ、ね、旦那樣、ね、いゝでせう、買つて頂戴よ、後生ですから……』

『うむ、可し！』と、コローボフは小聲で云つて微笑する。

『さうしてね、まだあるの、あのもう二つ、あのそら金の總の附いてる刺繡のしてあるヴェールを欲しいの』

『可し々々、さうすればお前は來るのか？』

マリアンカは首で諾いた。

『今夜？』

『え、』

『騙しやしないのか？』

マリアンカはウェランダの石の床を、ばた／＼と足早に後方へ行つて了つた。

枳殼の藪影からゲオルギイが跛の右の足を引きながら出て來た。

もうたゞ八つの仕切だけが殘つたのだ、俺の垣根の仕事も明日か、明後日は出來上りやせう、はゝ、俺はこれでも正直な別莊番だ、さうでせう、なあ、旦那樣？』

コローボフは默つてナフキンで口を拭いた。ゲオルギイは又云つた。

『我々は正直な、本當の人間でさ、ねえ旦那樣？ さうじやごわせんか？』

瀬沼夏葉譯

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

近代人の告白（つゞき）——アルフレッド・ド・ミユッセエ——

デゼネエがこの出來事を見つけ出した時に彼は私に云つた。

『なんだつて君はあの女を容れてやらないのだ。君はあの女をいやがつてるに相違ない。あいつは別嬪だからな。』

『君はふざけてるのかい。』と私は云つた。『あんな女を僕のをんなに出來ると君は思ふかい。僕が自分のをんなを他の奴ともやひにするのを承知するだらうと君は思ふかい。あの女は自分から承知の上で他の持物になつてゐると君は思ふかい。僕があの女を持物にしようとする戀を僕に忘れよと云ふのか。もし君の戀愛（ラブ）の仕方がそんなだつたら、僕は君のために悲しむね。』

デゼネエは自分はたゞ黑人の女が好きなのだと答へた。而して戀をそれほど眞面目なものとはしてゐなかつた。

『ねえオクターヴ。』と彼は云ひ足した。『君はまだ若い。君は存任してもゐないいろんな美しい物が好きなんだらう。君は生一本の戀愛を信ずるのだ。恐らく君はそれに適し

てゐるらしい。僕は君がそれに適してるとは信ずるが、しかし羨ましくはないね。君はまだいろんなをんなを持つだらう。ねえ、而していつかあの晩の出來事を後悔する日があるせ。此女が君の所へ來た時は、女が君を愛してゐた事は確なんだ。あの女は今はもう君を愛してはゐまい。と云ふのは女は他の奴の腕の中にゐられるんだから。併しあの晩その部屋では君を愛したのだ。この外になんにも仔細はない。君は其處で女が君に捧げた樂しい一夜を持つた。君はきつとそれを受け入れなかつた事を後悔するだらう。女は歸らないだらうからな。女といふものは自分に氣のない男でさへ無かつたら誰でも許してやるものなのだ。君に對するあの女の戀は、自分で惡かつたと白狀してあやまりに來たゞけでも大したものだつた。はね付けられると思つて來たのだらう。僕は噓は吐かぬ。君はあの晩を後悔するよ。屹度もう又とあんな機會はないだらうからね。』

デゼネエの云ふ事には、單純な深い自信もあれば、經驗上から得た落ち着きもあつたので、私は聞いてゐながら震えた程であつた。彼が話してる間に私は矢も楯も溜まらぬ程に私のをんなの家へまた行き度くなつた。それとも手紙を書いて彼女を呼ばうかと思つた。私は起き上る事が出來なかつたので、それがために、彼女が私と張り合つてる男を待つてゐるところか、それともその男と一緒に居るところなのか、どちらにしろ二度とそんな所

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を見つけ出して恥をかゝされなくてすんだ。けれども私はまだ彼女に手紙だけは書く事が出來た。それでもし手紙を書いたならば彼女が來るだらうか、と殆んどいや〳〵ながら我と我身に尋ねて見た。

デゼネヱが歸つてしまふと、私は非常に氣があせつて來た。而してどうかして氣を靜め度いと決心した程恐ろしい煩悶の後に、恐怖は終に戀を打ち負かした。私はをんなに自分は決して二度と彼女に逢ふまいと云ふ事と、もし彼女もその面前で私の入口の戸を閉め切られるような冒險をしたくないなら、逢ひに來ても與れるなと云ふ事を手紙に書いた。私は大きく鈴を鳴らして、出來得る限り早く手紙を渡して來いと命令した。召使が戸を閉めるや否や私は呼び返さうとした。彼は聞えなかつた。而して私は二度は呼ばうとはしなかつた。それで兩手の間に顏を埋めながら空しき絕望の餌として殘つた。

第三章

その翌日、夜が明けた時に第一番に私の考へた事は、『自分は今何をしたものだらう?』と自分に聞いて見る事であつた。

私は職業も持つてゐなければ、仕事もなかつた。私はどちらに身をはめ込むとも決心の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

出來ないなりに、法律と醫學を學んだ。私は六ヶ月間銀行家に雇はれてゐた。けれども綿密にやれなかつたので、逐ひ出されずにすむように自分から罷めなければならない程であつた。私はよい學問はしたが、けれども表面ばかりであつた。勉强はするのが好きで記臆もよかつたけれども、覺えるのに苦がないだけ忘れつぽかつた。

戀を追ふと云ふ私の唯一の財産は、更にかけ構ひもない自由であつた。青年時代から私は戀を崇めてゐた。謂はゞ心の中で崇めてゐた。ある日私のお父さんは私の將來を考へながら、いろんな職業の事を私に話して、その中から私に撰擇をさした。私は自分の窓によりかゝつて、庭園のしなやかな物淋しいポプラアの木を眺めた。私は是等のみんな異つた職業を思ひ廻して、而していろ／＼その撰擇について考へて見た。私は胸の中でそんな職業をずつと末の事まで調査して見た。そうするとどれも好きに思はれないで私は迷つて仕舞つた。私は突然地球の動くのを感じたように思はれた。丁度空間の間に地球を支配してゐる偉大なる目に見えぬ力が、突然私の感覺に感じたかのようであつた。私は空間に地球の上つて行くのを見た。それは私には自分が船に乘つてゐるように思はれた。私の前のポプラアの木は帆柱のように見えた。私は身を起してせのびをして叫んだ。『大氣に浮ぶ此船の一日の旅客たるとははかない者だ。人間が船の上の一つの黒い點であるとは誠に小さい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ものだ。私だつて人間だ。併し特種の人間ではない。」

此は十四の時に自然の面前で私の明言した第一番の誓約であつた。その時以來私は自分の好き嫌ひを制御する力はなくなつて、たゞお父さんに從順にするためばかりに職業を得度いと骨を折つた。

私はそれだから、怠惰からではなくつて自分自身の意志から自由であつた。私は又神によつて作られた物は何物に限らず愛した。而して人間から作られたものは大して愛さなかつた。人生に對しては私は戀ばかりを知つてゐた。世の中の事と云つてはたゞ私のそんなを知つてゐたばかりであつた。而してそれ以上の事を知り度いとも思はなかつた。だから大學を止めた後に戀に落ちてからは、私は本統にその戀は自分の一生涯續くだらう、而していろんな他の考へは失くなつて仕舞ふだらうと信じてゐた。

私のその日〳〵は怠けきつたものであつた。私はそんなといちんち居た。私の何よりの樂しみは、美しい夏の間中彼女を田舍に連れて行つて、而してその自然の景色のうるはしさは、常々私に惚れ〳〵した心持を起させる最も有力なものなので、森の中で草やしだを敷いて彼女の側に寢轉んでゐる事であつた。冬になると彼女は社交が好きなので二人して舞踏會に行つたり假裝會に行つたりした。それは私の怠けきつた暮し方が止む時がない

程であつた。けれども今となつて見れば、私は彼女が私に信實であつた間は私は彼女の事ばかり考へてゐたから、私を僞つた今となつては、私と云ふものは何も考へる的のないものになつてしまつた。

我の心の有様をよく分らせるためには、私はそこらの部屋の、いろんな時代やいろんな國々からの調度が、ごちや〲の塊りになつて入れ交つてゐるどれかの部屋に比較される事が出來る。我々の世紀には形體といふものが無い。我々は我々の時代や、又は我々の家屋とか庭園とか、その他のあらゆる者の上に、極つたしるしと云ふものが印象せられてない。市街を歩くとヘンリイ三世時代の剪み方をした鬚を持つてゐる人に出逢ふかと思ふと、他の人は奇麗に剃り落してゐる、一人がラファエルの畫にあるような頭の刈り込み方をしてゐるかと思ふと、も一人はイエス、キリストの頭のような頭をしてゐる。金持ちの座敷が又その通りで、奇妙な物づくしである。古代風と、ゴシック風と、ルネサンス時代とルイ十三世時代と凡てごつちやになつてゐる。だから我々はいろんな世紀に屬する物をば持つてゐるけれども、我々自身の時代の物と云つては、どんな世紀にも決して起らなかつた戰爭の事件を持つてゐるのである。折衷學派が今の世の人の趣味である。人々は見出したものは悉く手に入れる。その美のためには取るものもある、慰みになるから取るものもある、或人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は古めかしいからと云つて取る。見惡いのを取り得にして取る者さへある。そんな風で我々は恰も世界の終りも近づいたような紀念物の中に生活してゐる。

こう云ふのが私の心の有様である、私は廣く讀書をした。而して繪を畫く事も學んだ。私は秩序もなく澤山な物を暗記してゐた。それ故時によると、私の腦髓は空つぽになるかと思へば、又時としては海綿のように膨れてゐた。私は凡ての詩人達を次ぎ〳〵に崇拜した。けれども私は生れつき非常に感動し易かつたので、いつも違つた詩人を見つけるとその前の人が厭になつてしまつた。私は自分の身をひどく荒癈した物置き倉にしてしまつた。而して終にこれ以上新奇な物を得る事が出來ないので、私それ自身が荒癈となつてしまつた。

此荒癈の上に尚若々しい物があつた。それは私の胸の中の希望であつた。唯一の子供であつた。

此希望は何物にも枯らされず傷けられず、その上戀が極端まで高めてくれたけれど、此の希望は突然致命傷を受けたのである。私のをんなの裏切りが深くそれを傷づけた。而して私はその事を考へると、私の心中には、傷づいた鳥の苦悶のようにけいれん的に悶える或物があつた。（未完）

野上彌生子譯

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

髮（長篇）

――杉本正生――

一

黑谷の紺青色に浮き出してゐる杜がぽつと夕映の赤い飛抹になでられると、何となく夜に陷つて行く此世の寂しさが刻まれて來る。今日こそと思つて少し沈着きを以て筆記の淨書をやつて見てゐ、けれども、獰猛な力で押し倚せて來な印象の連鎖は何うかすると手の爪先までむづ痒く、強い肉感の欲求を覺えさせて來る。つい先刻まで極めて悲慘に見てゐた自己をせめて甘い此頃の遊興生活の室の中に逐ひ込めて考へて見なければ孝吉には耐えられないほど自分の影が淋しい。

ふと火鉢に火の絶えた事を氣付いて炭を投り込んで見ると、水分を吐く炭の火氣は何といふわけもなく可懷しい匂を漲らせる。ふと古里の夕べの忙しい湯殿の木の匂のやうに。而して夫れが頓て千鳥の夜の二階のほのばのしひ行燈の圓い姿を思ひ出せる。ぷんと衣の匂がして強い誘惑を持つた紅絹裏のまつ赤なたんぜんのくづれた襟付きが眼先きに來る。酒のあとの冷たいひえ湯の舌ざわりまでが明晰な記憶をもつてゐるのだから迚も今晩は止

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

すといふ事の覺束なさを疑へなくなつてゆくのである。

何か知ら自分は大きなものを考へなければならなかつたんだ。とさう孝吉は思つて見たけれども、強い女の匂とむづ痒い心持ちはさうした平坦な問題をさも行屆き難き悉かり自分とかけ離れた事の様に思はせる。今朝の恐怖、夫れは古郷に於ける自分の責任なり、何うかすると第二學期の試驗の危險を考へて見たのだつたけれども、さういふ非常な難事を背後に負ひながら遊樂の中に半面を浸してゐるといふ自分が又なく大きく恃まれてもゆくのだつた。

まるで衝動的に孝吉は机の後方の横側に並んでゐる簞笥の引出しをあけて見た。二つ目にはもう琉球の重ねが淋しく殘つてゐるばかりで開け閉じにも輕く簞笥が動く小淋しい心持ちを感じて見た。

『またお出かけかな。』

と呼びかけて這入つて來た寺の尼僧はごろごろに汚れた鼠色の着物を袖口を寒さうに兩方から倚せ乍ら、肩をすぼめてゐる。

『今晩は又冷えまつしやうな。要心してたんと召しておいきやす。……は……行く先きは酒と女子で温かすぎるや知れんけど……』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『冗談じやない。眞麼處へ行くんぢやありませんぜ。友人が些と風邪を冒きましてね』

『は……お見舞ちがひや。たんとお隱くし、あとから皆な菊勇さんに訊くさかいな。』

と懸る執念く言ひ乍ら孝吉の後方から羽織の衿を折つて遣つたりするのだつた。

『お遊びなるのも好けれども、好加減にして早う卒業おしやしや。好お醫者はんやあな。學は出來るし女子はんには親切やし、は……開業おしる時は婦人科におしるとえゝわ。第一祇甲の人達が診て貰ひに行かはる。』

『うるさいな。もう夫れだけ語や澤山だ。些と次手に僕の駒下駄を出しといて、ステックも一緒に。』

『止し止し。其替りにおみやげお忘れやすなや。甘泉堂でよけさくさかいに。』

のべつに可笑しい身ぶりをしながら尼僧は出て行くのだつた。孝吉は足袋の爪先きの泥の飛抹を帽子のぶらつしゆで擦り乍ら由本の下宿まで倚つて見やうと思ふのだつた。少し晩く行つて菊勇の出先きを貰ふといふ事が妙に興味を覺えるのだつたから、すは言へ今晩もまた歸れない破目になつちやつて明日の筆記に差支へはしないだらふかと思ふと心細くもある。恁う恐怖と事件に慣れて了つて何うなりゆくだらふか、とだんだん刺戟の强度を需むる心持ちの行く末を思つても見る。少時く孝吉は暗くなつた障子の前に衝つ立つてう

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なだれてゐた。已う逢はずとも飲まずとも濟まされさうな心持ちに在る。此心持ちを持續して已り今晩は止さうかと考へて見ると、其儘机の上の筆記を取り上げて見るのだつた。暗くつて文字の一つも見えるではないけれども、隨分複雜な記憶を惱ませる樣な問題が强文の續きに並んでゐる。恁ういふものに對すると俄かに冷靜な腦裡が欲しくなつて來る。何だかまだ自分は沈着いてゐない。矢張り最後の欲求の飽滿を感じてからでなくば空虚な心持ちを以て筆記に親しむ事は出來ないのだつた、と想つて見ると些し逢つて語つて來る位ゐな事ならまだ豐富な時間もある。菊勇が若し他の座敷に出てゐたらば思ひ斷るとするし、まだなら一時間を限つて逢つて見やう、恁う決めて廊下に出た。本堂の背後續きになつてゐる冷たい何となく古い匂のする廊下の半ばまで來ると、さうした自分の憐れにもまた堅實に思へる。小淋しい顏をして玄關に出ると尼僧は例のふざけた聲で冷評ふ。

『喧ましいな。土產なら忘れやしないよ。安心して早くお寐よ。』

なぞと自分も冗談を言ひ言ひ門を出るのだつた。

通りに出ると薄暮の中に埋まつてゆく人の背が耐らなく美しく見える。屋根の先端までぼつと薄い紫にかすんで見えて。まだ極新らしいインバネスの手觸りまでが心地よい。むやみに氣取つて孝吉は歩いて行つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

上京と下京との初冬の夜の趣きは悉かり區分されてゐる様なものだ。まるで岡崎といふ別の街から四條といふ花やかな都會に出る如く、夫れほどもどかしい小暗い町を多く通らなければならなかつた。

『杉井ぢやないか。』と往きすぎに聲をかけてゆく學生もある。さういふ一本調子の荒い堅實に見える人達の聲を避けるために二町ばかり來た處で俥を呼ぶのであつた。

菊勇に逢ふといふ強い悅樂の中には早く渡さなければならない金に對する輕い苦痛もある。菊勇も近來になつてさうした物の要求をしないばかりか自分の身の廻りにも手を出して呉れる様になつて來た。客對藝者といふ皮が次第にはがれて行つてまるで情夫あつかいにされてゆく様な心持ちもされるのである。

俥が小堀に出た時に、めまぐるしい小狹い町の電燈と物の賑かな音とにもう凡てを忘れるほどの娛しい心持ちがさしよつて來る。俥は故と四條をさけて新橋の方へまがらせ様とした時に、せゝこましい町の軒並を二人乘の一臺が丁度向つて駈つて來るのを見た。見るともなく夫れを見ると丸髷の紋付らしい羽織を着た婦人が抱き合つてゐる少女の頰に口を倚せて半面を此方へ見せてゐる。

『失敗た！』と孝吉は心に思つた。疑ふ餘地もなく母と少妹とに相違なかつたから。でも俥は行違ふ迄にきわどく右に曲つて呉れたはしたけれども、而して眼の鈍い母のことだから迚も此方の氣の付きやう筈もないけれども夫れでも何となく背後を振り返る心持になれなかつた。何の必要があつて今頃やつて來たのか自分に用事がないとすれば西陣にゐる妹の家へ來たのだらうけれども、成るべく逢はない方策を取るが近來の自分をうまく秘密に包んで了ふかの二途しかせつぱ詰つた方案はない。秘密にするならば此儘寺へ引返へしてあの簞笥と銀行の通ひとを見破られる恐れを防がねばならないし、或は極力逢はずに逐ひ返すか、の二途だと孝吉は毛深いインバネスに顏を埋めて咳き込むのであつた。

妙にぐつたりとしながら、而して態と平氣をつくろい乍ら千鳥樓の二三軒手前で俥を返してやつた。

『まあ。若檀那、晩おすやへんか。』

と慾う千鳥の仲居はすぼめてゐた兩袖を離して倚り添ふ樣に歩いて來る。孝吉は美しく梳き上つた小鬢の處を見乍ら薄笑ひして無言つて門を這入つて行くと、態と臺所の方へ廻つて見るのである。而して女將には悠然りと構へた風を粧ひ乍ら冗談を言ひ言ひ二階へ上つて行つた。北房には先刻まで客があつたらしく薄溫もりが殘つてゐる。インバネスを脫

つて貰つて緋羽二重の上に冷たい足を埋めると、急に心よい沈着きを覺え出すのであつた。仲居は石灰の白い火鉢の灰に切り炭を立てかけ乍ら、まつ赤な口唇を突き出してさも可笑しげに陽氣めかして高聲で話しかける。

『今日もまたお座敷だらうな。たまたま逢ひに來るとなかなか好い機會が當つて來ないから困つてじやふ。』

と孝吉は態と兩手の掌で頬の處を擦り擦り細い作り聲をすると、

『まあ、何うどす。其口はほんまに。』

とつんと火箸を縁にさし込んで其手で些と撲つまねをする。

『おや、好い櫛を差してるね。彼の人に貰つたの。』

と孝吉はついと身を迯して皮肉にからかふと悠然りと響いて來る太棹の二の音に耳を遣るのだつた。

『ほんまに。知りまへんえ。ほつときまつせ。』

と些と横睨らみしてまつしろな足袋の底を見せ乍ら下りて行く。多分隣りの離家からだらだらと思ふ義太夫のゆるいふしまはしは誘惑するやうな明晰りとした力で傳はつて來る。さういふものに連れて行くこんな聯想に身を委せて孝吉はいつの間にか身を伸ばして頭を

兩手で抱へるのだつた。

　何時だつたか、菊勇を自前にさせて而して自分も藝人になつて見たらば好いだらうなあと考へて見た事があつたつけが、古鄕の方の責任さへ脫れゝば、此れから進んで行かうとする道から見れば俳優なんぞわけもない事だと幾度考へて見たか、少しの才能と藝術上の僅かな智識とさへあれば舞臺の上の努力なんか知れ限つたものだ。何うせ亡父の名聞など完全に繼續できる自分ではなし寧ろ今の間に道を替へた方が自他の良策だとは幾度考へた事が知れなかつたが、ああ、矢張り自分は弱いなあ、小氣味よく斷行するといふ段になると矢張り因襲の一歩よりも出る事が出來ないのだから。

『おまつとさんどす。もうおゐでやつしやらふえ。』

とお梅が突き出しを溫かい匂をさせて持つて來たのだつた。

『お座敷ぢやなかつたね。』

と眼で容子を見せると、お梅も鼻先きに視線を倚せながら拗ねた眞似を見せるのだつた。

『お座敷やのどすやろけれども、電話口へ出やはりましとまへせ、二百二十番どすさかいあの菊勇（ひご）の家（うち）どすわなあ。』

『はゝゝゝゝさう慍らんでもえゝやおへんか。ほんまに。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と孝吉から碎けてかゝると、

『さうかて、あんまりやおへんか お座敷お座敷とおいやすもん。些とは菊勇さんの身にもなつとみやす。』

『身になりすぎて此通り、親と金とに勘當うけ。』

『いゝやの。若檀那。』

『嫌ぢやない、本當だよ。現に今晩お袋に逢つたんだよ、小堀のみの屋の前でさ。往き違ふ處をばつと、刹那此方の倅を曲げちやつたから彼方にはお解つてないから好い樣なもの今頃寺へ來てゐるだらうと思ふと心細い。夫れにあの妓はまだ見えぬ、今宵逢はねば此胸が……』

『さうどすやろな。お國からおゐでやしたんどすか。まあまあ、迎ひにおゐでやしたら何うしまへう。』

『夫れあ大丈夫、それよりやお梅ちやんのお惚けでも聞かして貰はないと濟まないや。此方の甘味い處ばかり聞かされてさ。』

『いやどつせ、もう此頃は甘さたなしどつせ。ほんまに苦勞するばかりどすさかいな。』

としんみりする樣な眼をしてぼつと此方を見詰めてゐる。孝吉は妙に其言葉の端しから

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

去年分れた新蝶の小品を思ひ出して見るのだつた。妓から妓に移つて來てもまだ小品から受けた程の深い印象を刻んだ事はなかつたから。さう言へばお梅の持つてゐる小指の柔かな肉付きまで、何うかすると耐らなく人を惹き付ける樣な眼の潤みまで小品そつくりな處がある。あゝ、何故小品を捨てゝ來たのか其後も作れば機會がないではないのに逢はうとはしないのか、何うかすると全く寂しさにとざされる樣な時が來る。丁度いまそれだ。

『女でも矢張り別れてから失敗つたと思ふ樣な事があるだらふか。』

と少し冷めたのを飲み干してお梅にさしてやると、

『そらありますえ。已う少し何うぞしたら離れえでもよかつたのになあと思て惜しい事がおすえ。口惜しい事がおすえ、其處は女子が弱いさかいどす。男はんなら世間位ゐどうでも出來まつしやろ。女子はさう親がおすしなあ、況して奉公しますさなあ。』

さうだらふなあ。だつて男子はなほの事だよ世間も顧慮するし家の責任もあるし、第一自分の身の出世も思はなければならないしさ。』

『さうやかて女子はんがあつてもそれが出來ん事はおへんえ。近い話しが菊勇さん落籍とお上げやしてもあんたはんさへお構ひやしまへんどしたら自前にしこけまつしやろ。而してあんたはんさへ確りしといやしたら親子はんにも義理がたつし、何うでもでけまつし

やおへんか。』

『處がさうは行かないよ。中々さういふ事で承知する母ぢやないんだものね。』

『後家で通しといでやしたお方はんはみな固うおすえなあ。』

と言つてあいたのをそつと持つて立つて行つた。少しまわると腦裡の妙に小寂しく醒めて行くのがつねである孝吉は只無性に遣る瀬なく何かは知らず需められて仕様がなくなるのだつた。ふと菊勇の聲がする。間もなくお梅と二人で上つて來るのであつた。

『待つとくれやしたか。遲おしたやろ。』

と何時もの冴えた調子がなほ更ら孝吉にはぴつたりと來ないのだつた。

『別に待つてやしないよ。歸らうと思つてたんだもの。』

『あゝ、さうどすやろ、妾しも來せて貰はんとおこかと思ふてたんどすえ。』

『こりややり切れない。直ぐあれだもの、俺れが態う出りや些とは優しく出るものだよ。』

『さうでなうても鍼とあんまで命をつなぐ菊勇どすやおへんか、此上優しうしてあたられとおみやす一人で死ねやしまへんえ。夫れが解つてゐますか。』

と言ひ言ひ細い金口の先きを袖口でそつと拭いて渡して遣ると、綺麗な濡れてゐる樣な眼で濟まして疊の緣を見詰めてゐる。何時の間にかお梅も熱いのを置いた儘で座を脫して

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

了つてゐた。

『寒いだらう、座布團を敷かなきや冷えよ。』

と言つて遣ると

『おゝきに。』

とさう小腰をかゞめ乍ら、粋な角格子のお召の淺黃裏をちらと見せ乍ら緋羽二重の座布團の上ににじり倚る。冷たい程綺麗に今日は髮を結つてゐる。

『夕飯がまだなら何處かへ行かないかい。』

『へえ。あたしがおごりまへよふか。今朝から大阪の方へ行てたんどすえ。』

『えつ。また老眼が來たんかひ。昨日からかい。』

『へえ。夫れについて相談もおすえ。何處ぞへ行きまへうか。』

『又お安くない惚けか、好なあ。落籍されやうてんだらう、北海道でも何處でもお行きよ、手紙の一本でも呉れたら己れは夫れで滿足する。』

と言つて貰の新らしいのに火を移すと何時の間にか忘れてゐた母に逢つて見たい心持にもなるのである。今から直ぐなら或は待つてゐるか知れないし、寧ろ何も彼も打明けて了つて悉かり生涯を改めるために名古屋の醫專に移つて了はうか知ら、すればあの可憐な母

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を安心もさせるし、妓と別れる事も出來る。何故か妙にさう今にも此處を出て見たい心持ちになるのだつた。

『何うかすると己は名古屋へ行かうと思つてゐるんだがね。迚も此年の二學期は及第しさうにもないしね』

強て聲を落し乍らさも淋しく語ひ出すのである。

『へえ。さうどすか、一人お行きやすのか。』

『勿論よ。誰人が尾いて來て吳れるい。お前は北海道へ行つちまふだらふしさ。京都にゐたつて一人ぽつちぢやないか。』

『まあ〱。いつ一人北海道へ行き度いて言ひました。妾が何うなさしますさかいあんたはんもおゐでやすて言ふてゐるやおへんか。』

『他人の落籍した女の尻に尾いて行くのかい、好なあ。』

と言つて淋しく笑つて見せると、綺麗な眼に已う露を溜めてゐる。悄然りとした肩の羽織の黒い衿の流れて行く下に赤い裏が覗いてゐる。妓は小うらめし氣に無言つた儘でそつと眼元を拭くのだつた。

『慍つたかい。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と言つて遣ると、

『一緒に行きまへうといふと尾いてかんならんとお言ひやすし、何處まで藝者してるつもやとお言ひやす事がおすやろ、一たんは北海道へもゆきますけれどもえゝ時分に逃げて來ますちふてるやおへんか。』

『己れはそんな事を聞かうと思つてやしないよ、他人の落籍した女を横取りするために學校まで捨てる男だと思つてゐるんかい。』

『それは無理どすえ、あんたはんが無理どすえ。何で今晩に限つてそないに妾しを苛め度すのえ。ほんまにあんまりやおへんか。』

『あゝ、俺は今晩何うかしてゐるんだよ。屹度、此儘歸つちやつた方がお互に好だらう。丁度母も寺に待つてゐる筈だからね。』

『へえ。お母はんがおゐでやしたんどすか。矢張り親御はんの方が强おすえな。夫れでそないに强氣におなりやしたんどすやろ。』

『冗談じやない、まだ逢つてやしないよ。さういふけれど己は此れで隨分責任が重いんだよ。』

『それは分つてます、そやさかい早う妾に何うぞおさしやしたらよろしやおへんか。妾

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も働いたらあんたはん位ゐ何うなと出けん事はおへんやおへんか。』

『解つてるよ、だつて己はそんな弱い男になりたくないんだ。一たい惚れた經驗もない男なんだからね。』

『已う結構どす。そないに恩にお被せやさいでもよろしおす。妾かて是れで苦勞してゐますえ。』

『分つてるさ。』

と孝吉から笑つてかゝると、

『まだ御用事おへんどすか。』

と言つてお梅が這入つて來るのであつた。而して菊勇の羽織の裾にそつと倚り誘つて小耳元に何か囁くと電話のかゝつて來た事を告げるのである。

『斷つとおくんなはいな。』

とよくも聞かずに菊勇は片眼をしかめて銜んと澄まして了ふのでお梅も小寂しく笑ひ乍ら間外れのした調子で二階を下りて行く。

『例の先きなら行つといでよ。後から貰ひをかけても好いから。』

と澁い生眞面目な顏をすると、孝吉は夫れなり仰向けに倒れて了ふのだつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『まあ、酷い事お語やすせな、俄に愛相づかしをおいひやすせな。』

と言つてさめたのを幾つとなく續きに飲み下すのだつた。而して少し茫とした眸で男の寐顔を見てゐるとそつと重い黒縮緬を脱いで裾の處に掛けて遣ると、頓て靜かに階下に降りて行くのだつた。いま招らせを受けた新らしい好い口の客と、此月限りに落籍する筈の大阪の客もまだ其腦裡にはあつたから。夫れでなくとも實妹のために背負ひ込んだ借金が一日の閑もなく菊勇の身を縛つてゐる。然うした辛辣な間を偸んで僅かに忍び逢ふ一夜のために種んな苦しい方案をめぐらさなければならなかつた。夫れすら深く知らうともしないだけ夫れだけ男が可愛い。——未完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

痲醉劑

—小林歌津—

その町は、廻漕店やら運送やらの多い町であつた。

カンカンする赤黄色い日盛の日をあびて、荷造りの繩くずのごぶ、ほこり臭い、鐵鎚の音の、頭を、つんつん響くせまい横町を、女はしぶい顔をして、男の後からついて行つた。すゝけた、眞黒な軒に、うす赤くなつた半紙に卷かれたたてまいの祝柱ののせてある大工の家と、大勢の女どもが、ふとつた肩を片はだぬいて、汗をふきふき眞緒の手内職をしてゐるのが、すだれ越に見える家とのせまい露路を男は曲つた。そして角から三軒目の新らしい格子戸の前に立ちどまつた。

『小母さん今日は……………』と男が聲をかけた。

『はい………おや田中さんお見かぎりですことね、——お連れさまは？』

かう云ふ町にはよく見かける人相の、五十婆さんであつた。いやに下品な目づかひを女の方に面けて、まじまじと、汗のしみ出てゐる胸の邊から、色のさめた鹽瀨の袴の方にはしらせる。

『何……妹分ですよ、それぢや一寸よろうかしら……をい光ちやんよつて休んで行かうぢやないか』

安普請のいやに、白つぽい梯子段を女はしぶしぶ上つて行つた。前桐の簞笥それに、同じ様な用簞笥と、まがひ銅の落しの入れてある長火鉢が、見るからぶざまに並んでゐる。男はいきなりその上衣をぬいで、用簞笥の小戸棚から菓子器や、びん入りの西洋菓子の様なものをもち出して、女にすゝめるのであつた。

『あの私の連れて行つていたゞくのは、こゝなんですか』女が、ぶつきら棒にふいと、たづねた。

『いや、それは、こゝの近所から出る山手線で行くのです、そこは、四時に行く約束なんで……未だ、一時間半ばかり早いから一寸休もうと思つてね……まあ遠慮なく、足でもおのばしなさい、こゝは、私の借りてゐる家なんですから。』

女は、何時か、この男の妻君から、淺草邊の鳥やの女とかを、圍つてあるとか云ふ様な話をきいた事のあるのが、思ひ浮んだ。

『それぢや、あのお妾宅なんでせう』

『妾宅……そんな洒落たと云ぢやないですよ』うす笑ひを、かみしめたと云ふ様な顏つ

きで、男が答へた。

この長火鉢の前に座つた女……何だかそれが、女の見た事のある顔の様な氣がした。

一日何かせずに、つくねんと、こゝに座つて、男を待つてゐる女の心が、どんな風なものだらうと思つたり、その又圍ひもの〻内所の家に妻君の身内の自分を連れてきたりする好な男の氣分が、どうしてもわからなかつた。女は、ぢつと、そんな事を心に考へてゐた。

湯をとりに行つた男が間もなく白い湯氣のたつ茶碗を、盆にのせてよつて來た。

『何を考へこんでゐるんです……』男は、そのぶざまな、大きな顔をのしかゝる様にして、女の顔をのぞきこんだ。

『こゝにゐた、お町さんて云ふのは、どうしたんです？』

『名前まで知つてるんですか……こいつあどうも、恐れ入りましたね。……あいつは、どうも、無教育でね……やつぱり元の巣にかへしてやつたんですよ』

この男のお玩具になる女に、そんな教育なんかが、ゐるのかしらと、女は不思議に思はれた。元の巣にかへしたんでなくつて、返さなくつてはならなくなつたのか……にげてかへつたのかとも思つた。

『未だ、早ようございますか』

『そうもう少したつたら出かけませう。——それでと。貴女を御紹介しようと云ふ家は、西大保の……まあなの邊一の、富限者なんです、そしてそこの二番目の、娘——十二か十三の娘に、英語と國文を敎へてゐたゞきたいと云ふんでね……それで、なるべくならば、そこにねとまりをして頂いてお行儀のところも、一つと云ふお母さんののぞみなんですが、そりあ光ちやんの、お都合次第で、どうでも、僕がしますけども……』

『別に私の自分の時間が、一日に、三時でも四時間でもあれば、そちらに、とまつてゐても差つかへもございません』

『そうですか……そいで、その御自分の時間にやあ、何をするんです。』

『勉强をしなければなりませんもの』

『何の勉强です?もう外國語も澤山でせうに……何の勉强です一體?』

お前なんかにわかるもんかと云つた樣な、とりすました、高慢ちきな、女の顏を、男は、馬鹿々々しいと云ふ樣な、笑顏で見上げた。

『色々と……』

『色々と、困りましたね、そんなにえらくなつちや——あんまり女のゑらいのもいけませんからなあ——それよりは、お嫁ぎなさいよ——そして、親類のもんにも、安心おさせな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さい、家の妻(やつ)もそう云つてゐますよ。一體いくつです？』

『二十五なんです。』

『二十五！お若いなあ、僕よりはたつた、三つ下なんですか。……いくらでもお世話するとこはあるんですよ。』

『………………』女は相手もしない樣な、顏をしてゐた、そして、この男の一言一言が、癪(しやく)にさわつた。そして、紹介して呉れると云ふ家庭教師の家なんかも、どうでもいゝと、思つてしまつた。只わけもなく、身體の中が、ぞくぞくする樣な、むずかゆひ樣なその、どんよりした、みにくい、にぶい感じのする男の眼をむけられる度に、猫にらまれた鼠がすくんで行く樣に自分も思はれた。

『今日、あなたがいけないのなら私、これでお暇しますから………』ついにこんな言葉が脣に浮いて來た。

『まあ、もう少しですから………何すぐ行きますよ………ねもう少しお待ちなさい………』

女の心には、折角の一月の月給が手に入る事を思つた、そして、うぶな小娘のやうな自分の氣を急に、恥かしく思ふと、又力なく、座蒲團の上に腰が落るのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

男の足音が一段一段と遠ざかつて行く……女は自分の顔が、一體に緊張して、頬が、ひきつる樣に覺えた、そして思ふ樣となりたい樣な又、その聲が、咽喉を氣もちよくすべり出ない樣な、眞黑な、わだかまりが、胸の中を、あつちこつちとかけづりまわつて、何も云へない、いやないやな、氣になつて來た。夕暮にちかい頃のきたない强い色の太陽が窓を通つて座敷中にすべりこんだ。下では男の太い聲と、妙にはしやいだ、婆さんの、聲が高くなつたり低くなつたり、時には、笑ひ聲もまぢつて、きこえて來る、

耳の低にのこつてゐる男の聲——目の低にまだ影を落してゐるあの男のいやな顏——女は、ぶるぶると思はずも身ぶるいをした。

『そんなかたくなはおよしなさい……………つまり、御自分の損と云ふもんです。いやに窮屈な、敎師よりも、何でも御自分の好きな事が出來て、そして、高が拾二圓や拾三圓の月給をとるよりも、骨も折れずに、たんと、月々に手に入るんだあね、………何にも、お母さんには、どつかへ勤めると云へばすむ事なんでせうし………あなたみたいに頑固でも、いけませんよ、誰だつて——どんな、偉い人だつて表と、裏はあるもんです!』裏をこしらへろと、男は云つたんだと思ふと女は、いまいましさにあのにくい體な男の大面を、ひつかきむしつてやりたいと思つた。『人を馬鹿にしてゐる!』とりつめた腹立しさに、女は、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

口のうちで『馬鹿にして！』をくりかへした。家にある妻は、纖弱(ひよわ)だから私はつまらないとか、教師に行くだけの月給はやるから、どうぞ、急がしい、めまぐるしい會社の用に疲れた自分をなぐさめて呉れとか…………　…

女は、惡體ついて、ついて、わめきちらして、やりたいと思つても妙に聲がつまつてしまつて。咽喉を出ない。齒をくひしばつたまんま、身體を、横にふつて見たり、なま新らしい唐紙に、爪をたてゝびりつとさいて見たり、そこにある茶碗をころがして見たり、あらゆる物品に、自分の、かんしやくを、あたりちらしたりした。

男は再び上つて來た。そして何か云つたけれど、女の耳には何にもひゞかない。額の眞中におそろしい八の字をこしらへて、ぢつと、男のいやしい目元をにらんだまゝ…………

『さあ、まうそんなにおこるもんぢやありません、光ちやんがいやならそれでいゝし………このお菓子でもたべて、出掛るとしませう！さあ、まうおこらないで下さい、ね、ね、さあ、おつかみなさい、そして西大久保へ行きませう………』

男の手には、黒い飴の様な、洋菓子の入つてゐる、瓶があつた。女の尖つた目かどには、レッテルの赤い横文字が入つた。それは、英語ではない、佛語でもないらしい………ふつと、恐ろしい空想(かんがい)が、頭をついた。麻酔剤(ねむりぐすり)をしこんである菓子！………そして、女の目に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は麻醉にかゝつた後の男の、笑顏やら、下の婆さんの聲やらがうつつた。――そしてそれはまつたく麻醉劑にちがひないと女の頭の中では、きまつてしまつた。

『どうです、レモンの匂ひがしますせ』

男は、女の手の上に、それをあけた。にちやにちやんと掌につく黒い菓子を女は、やけにひつかんで、男の肩ごしに、長やの窓ののぞかれる、中まどから露路の方へ、なげ捨てゝしまつた。

呆然(ぼんやり)とした男の顏が、うす暗に沈んでゐる。女は、ついと立ちあがりざま、づしづしと梯子を下りた。（完）

十月三十一日

お染久松——原田琴——

人形のお染久松ならべてもこの美しさそのやるせなさ

七度もつゞけさまなるくちづけに妬き涙の面見られけり

心中が戀ひ病ひかその外にわが死ぬすべはあらじと思へる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心中の夢ばかり見る少女子を君戀ふるこやあやうしあやうし

君をもて世の大方の男をば知るとはいまだいひがたければ

七人を思へる君と聞きしより遊ぶ心となりにけるかな

後姿のうら寒げなる男をばあはれむ心うすらぎにけり

やゝ少しおどけて見えぬ添臥は女ばかりぞ有明の月

淺草の少年よりもわが前にとんぼかへりをする君かなし

夜もすがら蟲なき通すあぢきなさ風の寒きに君をかへせば

大方の涙をわれは覺えけりいまはまどはじ匕人を見て

京に來てまづ思へるは加茂川の五條橋にて君と逢はまし

よきほどにあらぬことまで云ひそへて浮名たてるもをかしきものぞ

有明の月を眺めてかへりゆく君のうしろに身を投げてまし

弟が裏の林に口笛を吹く夕ぐれのわがなやましさ

冬の夜のうす紫の寒き頬をくちづけられしはづかしさかな

裏町を君とゆく時いと輕き草履の音さへ忍びゆく時

別れんといふ日も君はおもむろに眼鏡のちりを拭ひ給へる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

この頬にくちづけなき日、白刃もて傷くるより
泣かまほしけれ

美しく泣きくづほるゝ時ばかり君が心の少し
傾く

走り來しこの狂ほしさやるせなさたゞひと突
きに刺せと思へる

さはれ君さびしからずや初秋となりて少女の
泣かぬ夕ぐれ

たゞ少し女優の噂云ひ出でて口つぐみたりわ
が前の人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

メルストロエム――ポオ――

「今、私の御話いたさうとして居ります事柄はこゝ二三日で丁度三年目になることで、一千八百年の七月十四日のことでした。この地方の住民の決して忘れられない、この日は未曾有の大暴風の吹きまくつた日で御座います。それだのに朝から午後おそくまで西南の風が穏かに吹き、日は輝いて居りましたから、私共漁師仲間の年功のあるものさへ、今やつてこやうとする暴風を前以て知ることは出來ませんでした。

「私共三人の兄弟は午後二時頃にいつもの漁業場の群島に渡りました。すると忽ち魚は船一ぽいになつたので、私共は曾てないこの大漁をあやしみあひました。私の時計が丁度七時の時に、ストロェムの難所を干潮（ひきしほ）の時に越す樣にと。私共は錨を上げて歸らうといたしました。その時刻は八時なのでしたから。

「快い風を右舷に受けながら、船を出してから、暫くは危險といふことなどは夢にも思はず非常な速度で走つて行きました。全くそんなことを考へさせられるやうな徴候は微塵もなかつたのでございますから。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「突然ヘルセッゲンの頂から吹き下して來た風が私共に不意打を喰はせました。こんた事は全く珍らしいことで、これまで一度もなかつたのでございます。で、私はなぜだか少し不安になつて參つたのです。私共は風に向つて漕いで行きましたが、渦の處は少しも進むことが出來ませんでした。そこで私は碇泊所に引返さうと思つて、ふと船尾の方を振向くと、地平線のあたりがずつと赤銅色の不思議な雲で蔽はれて居るのでした。雲は大した速力で上へ、上へとひろがつて來ます。

「その間に私共の邪魔をしてゐた風はすつかり落ちて、全くの凪となりました。私共は彼のまに／＼あてもなく漂つて居ました。併しこの間は極短かゝつたので十分考へてゐる丈の時がありませんでした。一分とたゝずに暴風が襲つて來ました。二分とたゝずに空は一面に暗くなりました。これと今一つには水煙の爲め、船の中ではお互の顏さへ見えない程俄に暗くなつて來ました。

「こんた大暴風を言葉で云ひ現さうと思ふのがすでに馬鹿氣たことでせう。諾威中で一番年をとつた漁師でもこの時のやうな暴風には一度も逢はなかつたさうです。私共は暴風の來やうとするとき一早く帆を下しました。けれど一番初めの一吹きで檣は二本とも切り取つたやうに船の外へ落ちて仕舞ひました。その檣の大きい方には末の弟が危險を恐

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れて、自分の身體を繩で縛り付けてゐたんでしたが。

「私共の船は凡そ水の上に浮ぶもの丶中で一番輕い羽毛(はね)に過ぎません。けれどその船には甲板が平らに張つてありました。船首に寄つて只つた一ツの水門が開いてゐましたが、それはストロェムを横ぎるとき、狂波(きちがひなみ)をよけて、いつも口を締めるのでした。もし此場合かうしなかつたならば船は忽ち沈沒した筈でした。と申すのは暫くの間身體は全く水の下になつて居りましたから。私の一番上の兄(あにき)がどうして助つたのだかそんなことを確める機會はとてもなかつたので私には分りません。私自身は前檣の帆を下すと同時に甲板の上に腹這いになり、船首の狹い上縁に足を突張つて、手では前檣の根元の環付螺釘を握り締めて居りました。かうさせたのは只もう本能ばかりの働なのでした。(けれどそれが自分のなし能ふ最上のものだつたことは疑ひない。)何故なら私は考へる丈の餘裕さへありませんでしたから。

「暫くの間私共は水の中にをりました。私は息を詰めて、環付螺釘にしがみついて居りました。が、もう息を抑(おさ)へてゐられたくなりましたので、私の手はなほも放さず膝で立ち上つて、頭だけ水の外へ出しました。それで頭ははつきりさしました。間もなく船は丁度水の中から出て來た丈のやうにひとふるひして、いくらか浮き上りました。私はぼつと

なつた心を引立て、氣を取沈めて、どうしたものかと考へてゐますと、不意に私の腕を摑んだものがあるのです。それは兄(あにき)でした。私は兄はもうとうに船の外にほり出されたものとばかり思ひ込んでゐたので無性にうれし御座いましたが、すぐそのうれしさは皆恐ろしさに變つて仕舞ひました。兄は私の耳に口をつけて「モスコオストロエム」と一言叫んだものですから。

「この時の私の心持がどんなだつたか知つてゐるものは一人もありますまい。私は丁度瘧の極々烈しい發作のやうに旋風から足の爪先まで震へました。私には兄が云はうとしたことがこの一言でよく分つて居りました。兄が私に知らさうと思つてゐることがよく分つて居りました。それは風に吹き寄せられて、私共は今ストロエムの渦の方に押しやられたのだ。もう何と言つたつて、助かりつこはないと言ふのです。

「もう御承知の通り私共がストロエムの海峽を横ぎるには、どれ程天氣の穏な時でも、いつも渦のずつと上の方を、干潮を待つて、出來るだけの用心をして渡るのです――それだのに、まあ、今私共は渦の眞只中へ落ちていくのです。しかもこんな大暴風(おほあらし)の時にけれどその時私はこんなことを思ひました。「確にさうだ。丁度干潮の時ぢやないか。多少望がないでもない。」と。けれどさう思ふがすぐその後からそんな仇な希望なんぞを夢

見たことの皆大馬鹿の沙汰だつたことに氣付くのです。たとへこの船が九十門の大砲を備へた軍艦の十倍もあるものだつたにしても、その運命は分りきつて居ります。

「この時はさしもの暴風も最初の一吹が過ぎ去つたところでした。いやそれとも暴風の前をあまり早く走るので却て左程に感じないのかも知れません。併し兎も角、最初風に抑へ付けられて、平らになつてゐた泡立つ海は今大山のやうにもちやがつて來ました。空も妙に變つて來ました。どつちを見ましても矢張りぐるつと瀝青のやうに眞黒でしたが、殆ど頭の眞上の處にふとこれ迄見たことのないやうな明るく晴れた、光のある濃い藍色の空がまんまるにあきました。そしてそこに滿月が今迄知らなかつたほど不思議な光を放つて輝き出ました。私共の周圍の何もかもが月の光でいかにもはつきりと照らし出されました。けれどオ、その照し出された光景は、まあ何といふことでせう。

「私は一度ならず、二度迄も兄に話しかけやうといたしました。けれどどう云ふものか響が大變強くなつて來て、一生懸命に兄の耳元で怒鳴つて見たところで一言だつて先方へは聞えやしないのです。と、不意に兄は死人のやうに眞蒼（まつさを）になつて頭を振りました。そして「氣を付けろ」とでもいふやうな具合に一本の指を差し出すのでした。

「一體兄が何と思つたのか最初はよく分りませんでしたが、すぐいやな、いやな考へが閃

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

めいて來ました。で、かくしから時計を取出して月あかりにその面をすかして見て、私は思はず涙をはら〱とこぼしながら遠く海の中に投げ込んで仕舞ひました。時計は七時で止つて居たのです。もう干潮の時間には遲れてゐますし、ストロエムの渦は今暴れ狂つてゐる眞最中ぢや御座いませんか。

「總て船といふものは造りがよくて、內の道具立が整つてゐて、その上積荷が輕ければ、暴風の時大波の中を勢よく走つて行くと、波が自然と船の下を後へ辷つていくやうに思はれるもので厶います。陸の人には大變不思議に見えるさうですが漁師達は「馬に乘る」と言つて居ります。

「これ迄の處では私共は兎も角上手に船に乘つたので厶います。ところが不意に大波が船尾に起つて、空にとゞくかと思はれるばかり高く、高く船を持ち上げました。今が今まで私はどんな波だつてこんなに高く立たうとは思つてもゐませんでした。やがて船は搖き上るやうな、滑るやうな、又は沈んで行くやうな運動を始めました。まるで夢の中で高い山のてつぺんから落ちる時のやうで私は眩暈(めまひ)がして、氣持が惡くなりました。けれど波の上に高く上げられた時私はあたりをちらりと見渡しました――只この一目丈で、何もかも、よく、よく、見ることが出來たので厶います。そして、私は自分達の居る場所

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

をはつきり知りました。モスコーストロエムは眞正面、大凡一哩の四分の一の處に見えるぢやムいませんか。おまけにいつものモスコーストロエムとは違つて居るのです。其違いと加減は今御前様が御覧になつてる渦と水車溝とのやうなものでムいます。もし自分が何處に居るのかどうなるのかを知らなかつたなら、この場所があつとも分らなかつたかも知れません。さうと知つた私は我れ知らず恐ろしさに眼をつぶりました。眼蓋が自然と痙攣でも起したやうに堅く閉ぢ付いて仕舞つたのでムいます。

「それから二分とたゝぬ間に俄に波が靜まつて、あたりは泡だらけになつて來ました。船は左舷の方へ半分ばかり、鋭く轉じたかと思ふと、電光（いなづま）のやうにその方向へ走りました。と同時に今まで聞えてゐた吼るやうやな水音は數千の汽船が一度に發する汽笛のやうに耳を貫くばかりの鋭い叫び聲ですつかり消されて仕舞ひました。今私共は渦をいつも取巻いてゐる激浪の帶の中にはいつたので御座います。私は勿論かう思ひました、次の瞬間には深淵の底に沈むのだと——今ひどい速力で走つてゐる爲めに其底はよくは見えませんが。船はまるで大波の表面に浮ぶ泡のやうで水の中に沈むやうには全く思へませんでした。右舷は渦に接して居ります。左舷には今通つて來た大海の世界が、我共と水平線の間に途方もなく大きな壁のやうにのたうちながら立つて居ります。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「可笑しいやうですが、今、渦の腭の中にはいつて見ると、先刻近づいて來る時よりも却て氣が落付きました。もう助かる見込はないと腹を極めると、初め私を氣違いのやうにしたあの恐ろしさも大方は取去られたのでした。私の神經を確とさせたものはどうやら絕望のやうでムいます。

「何だか自慢臭いやうですが、全く本當のことを申し上げるのでムいます――と申すのはかうして死ぬのは何てまあ立派なことだらう、神樣の御力のこんな偉大な表現を目のあたりに見ながら自分一人のくだらぬ事をとやかく思ふのは何て馬鹿々しいことだらうと私は考へ出したのでムいます。この考が心に浮びますと私の顏は恥かしさに赤くなりました。間もなく私は渦に就て知りたくて〳〵たまらぬ程の好奇心を起しました。たとへ身を犧牲にしても渦の深さを探らうといふ一つの願望を確に感じました。そして一番殘念に思つたのは今見るこの神秘を陸に歸つて、仲間の奴等に話してやることが出來ないといふことでした。言ふ迄もなく、この考はかうした切迫詰つた非常な場合としてはどうも妙なあてにならぬ妄想でムいませう。その後何度か私はかう思ひました。渦の周りを船が廻つたので少し眩暈がしてゐたのぢやなかつたか、と。

「が、今一つ私を落付かせたものがあります。それは風が吹き付けなくなつたことで、お

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

前樣も御覧の通り、渦を取卷く激浪の帶は通常の海面よりもずつと低くなつて居ります。そして海面は今、私共の上に高く、黑い山の脊のやうに聳えて居ります。海で大暴風に出逢つたことのない方にはとても風と水花の烈しさに心がめちやめちやになつて仕舞ふことなどは思ひもつきますまい。全くこのために盲目にされ、聾にされ、息を塞がれて働くことも、物を考へることまでも出來なくなるので厶います。けれど今はもうかうした苦しさは餘程無くなつて居りました。——まあ言つて見れば牢屋にぶち込まれてゐる罪人がいよ〳〵死刑の宣告を受けると今迄禁じられてゐた我儘も少しは許されるといつたやうなあんばいで。

「私共は幾度激浪の帶の周りを廻つたか知れません。どうやら一時間位も、浮ぶといふよりは飛ぶやうにぐるぐると廻りながら、だん〳〵大波の中にはいつて行つて、やがて渦のおそろしい內側に次第に近付いて行きました。この間私は一寸の間も握りしめた環付螺釘を放しませんでした。艫の方にゐた兄はそこの樽の下にしつかり繋り付けてあつた、虚つぼの小さな桶にしがみ付いてゐました。もう最初の暴風の時、甲板の上のものは皆掃き淩はれて、殘つたのは只この水桶だけだつたので厶います。渦の中心に近寄つた時、兄は水桶の手を放して、私の見てゐる環付螺釘の方へ馳けつけて參りました、とこ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ろがそれが二人して握るほど大きくないものですから、兄は恐ろしさのあまり苦しまぎれに私の手をもぎ放さうとするのです。私は兄のこの仕業を見た時ほど悲しく思つたことはムいません。――もとより兄は其時あまりの恐ろしさに氣違ひになつて居たのだとは知りながらも矢張り悲しくてたまりませんでした。が、私は兄と爭ふことはしませんでした。どちらがどれを掴んでゐやうがもう同じことだと私は思つて居ましたから、で、兄に環付螺釘をやつて、自分は水桶の方につかまらうと思つて艫の方へ行きました。こんなことをいたしますのには左程骨は折れませんでした。と申すのは煮え返るやうな渦の大きな動搖で、船はあちこちにゆすぶられる位なことで、全體は極平にそして安全に廻つてゐるのですから。水桶の處に行つたと思ふとすぐ、船は右舷の方にひどく傾いて、突然渦の底に眞逆樣に落ちて行きました。私は口早に御祈禱をして、もう何としても駄目だと思ひました。

「落ちて行く時は何とも知れないいやな氣持がして、思はず水桶にしがみ付いて、眼をつぶつたものです。そしてもう死ぬのか、死ぬのかと身の破滅を心待ちにして、暫くの間は眼を開けずに居りました。ところが不思議にもまだ水と最後を爭ふ時は來てゐないのでムいます。時は秒一秒を過ぎて參ります、けれど私は矢張り生きてゐるです、やがて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

落ちて行くのを感じなくなると、先刻泡の帶の中にゐた時のやうな動搖を覺えました。尤も今度は船がもつと縱になつてゐたといふ相違はありますけれど。私は勇氣を出して、今一度目をあいてあたりを見ました。

「私はどうしたつて其時の畏ろしさ、怖さ、尊さは生涯忘れられません。船は深い大きな漏斗の內側に、魔法かなんぞのやうに吊下つてゐるのです。漏斗の內壁は全く滑かなので、もしもこれが獨樂のやうに眩暈のするほどの早さで廻つてゐなかつたなら、又先刻申上げたあの圓い雲の裂目からのぞく滿月の黃金色の光が眞黑な壁を流れ下りて、ずつと深淵のどん底までも殘る隈なく照らして、物凄いやうな目映い光を反射させてゐなかつたら、黑檀で出來たものと間違へられたかも知れません。

「最初は心が顚倒してゐたものですから、何も細いことは觀察することが出來ませんでした。只恐ろしい偉大な光景が全體として目にはいつた丈で御座いましたが、少し我れに返ると私は思はず底の方を見下しました。底の方は渦の斜面に吊下つてゐる船からは何の邪魔もなく見下されるのでムいます。船は全く平に走つて居ります。――委しく申せば甲板と水面とは並行に橫はつてゐるのでムいます、けれど水面が旣に四十五度以上の角度で傾いて居りますから、私共はまるで甲板を支へる橫木の上に寐てゐるやうなもの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でした。こんな危つかしい處に身を置いてゐましても、平らな水面にゐるのと左程の違ひを感じませんでした。多分自分達が廻轉してゐる速度があまり早いからでムいませうが。

「月の光はこの深い漏斗のどん底を探らうとするものゝやうに照つて居ましたが、でも私には矢張り、何一つとしてはつきりとは見えませんでした。何もかも霧の中に深く封じ込められて居るんでムいます。さうしてその霧の上には回々教徒が「時間」と「永遠」との間の唯一の道だと申しますあの狹い、ゆら／＼の橋のやうな美事な虹が懸つてゐるぢや御座いませんか。この霧は、――詰り水煙ですが――漏斗の大きな壁が其底で皆一緒に出逢つた時、水がぶつかりあつて出來るのに相違ありません。けれど霧の中から天にまで昇る凄じい叫び聲は何か私には分りませんでした。

「初めの泡の帶の處から渦の中へ辷り落ちた時は一瀉千里の勢で斜面を下りましたが、それから後は其割合には決して下だつて行きません。私共はぐる／＼と廻つて居るのです、これといふ極つた運動もなく、眩暈のするやうにゆすぶれたり、急に跳ね上つたりして。時には五六百ヤードも走るかと思へばやつとのことで渦の周りを一めぐりする時もムいます。けれど一廻轉毎に底の方へ下りて行くことは遲くともはつきりと分つて居りました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「かうして自分達が運ばれて來ましたこの流れてゐる黑檀の荒野の上で、あたりを見廻しますと私は渦の中に卷き込れたものはこの船ばかりではないと氣付きました。上にも、下にも船の破片や、材木や、生木や、家具や、破れた箱や、桶、板などの色々なこざ〱したがらくたものが一緒になつて居るのでした。先刻も申上げた通り、最初の恐ろしさに引きかへて、今は不思議な好奇心で一杯になつて居りました。そしてその好奇心は恐ろしい運命が近づけば、近づくほど增して行くやうでした。私は今不思議な興味をもつて、自分達と一緒に浮んでゐるこの無數のがらくたに注意しはじめました。私は無我無中なつてゐたに違いムいません。と申しますのは底の水煙の方に落ちて行く品物について、どれが一番早いか見込みをつけて面白がつたりするのですから。「今度は屹度この樅の木が卷き込まれて見えなくなるのだ」と言つてゐるのにふと氣付くやうなこともムいました。するとやがて壞れた和蘭の商船がそれより先きに沈んで行つたりしますとがつかりするのでした。幾度かこんな見込みをつけても、どれもこれも皆んな外れるので、とうとこの事實から、――いつもきまつて當らないといふこの事實から私ははじなくも或る恐に襲はれました。すると、私の四肢は又ぶる〱と震へ出し、動悸は今一度激しく打つて來たのでした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「と言つて私の心をかうまで打つたものは何か今迄と變つた怖いことに氣付いたといふ譯ぢやないので、それよりももつと心を掻き亂す希望の緒がほの見えたからなのでムいます。この希望は今、目の前に見えてゐる事柄に前から知つてゐた記憶が手傳つて出來たので、その記憶と申すのはこんな事なのでムいます。一度モスコオストロエムの中に吸ひ込まれて、又吐き出されて、ロフオデンの海岸に流れ寄つた限りもない雜物は大抵ささらのやうに無慘に揉み荒されて、そこらぢゆうに散らばつてゐるが、その中にどうかするとそつくりそのまゝの形をしたのが交つてゐたといふことを思ひ出したのでした。そこで私は兩方の差異をかう考へるより仕方なかつたのです、ざらざらになつた方は全然渦の底に吸ひ込まれたもので、無傷なのは潮時に近く、渦の中に卷き込まれたか、又は何か他の理由で、早く卷き込まれはしたが、ぐずぐずしてゐたもので底まで屆かないうちに、滿潮なり、干潮なりが來て仕舞つたのだらうと。それはどちらにせよ、渦の底まで吸ひ込まれずにこんな具合で又海の上に卷き上げられるやうな場合もまんざらなくはないと思ひ付きました。

それから又重大なことを三つ觀察いたしました。其の第一は概して物體が大きければ大きい程、沈むのも早いといふことで、第二は同じ容積の二個の物體が、一つは球形で今

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一つはさうでない場合、球形の方が沈み方が早いといふことでございます。第三は同じ大いさの二個の物體が其一つは圓筒狀で今一つは外の形をしてゐる時、圓筒の方が沈み方が遲いといふことでございます。私は命拾ひをした後で、この村の年寄の校長さんと二三度この話をいたしました。「圓筒」だの「球形」だのといふ言葉の使ひ方はその校長さんがお敎へ下さつたのでございます。その說明は今はもう忘れて仕舞ひましたが、校長さんは私の觀察したところが道理に叶つてゐることや、渦の中に浮ぶ圓筒は同じ大さのどんな形のものよりも渦の吸引力に逆つて、容易に巻き込まれない理由などを話してくれました。

「こんな觀察を私がする上に與つて力があつたばかりか、其觀察を利用しやうといふ氣まで起させた事がムいました。それは漏斗の中を廻る度每に桶や、帆桁や、檣のやうなものが、私共の側を過ぎて行きましたが、最初私が眼を開いてこの渦の驚嘆すべき有様を見ました時は船と同じ位な高さにありましたのに、今はずつと私共の上にあるので、初めの位置と大した變りがないらしくも思はれたことでムいます。

「私はもう躊躇ひなどはいたしません。今噛り付いてゐる水桶に自分の身體をしつかり縛り付け、水桶を船尾から切り放してそれと一緒に海の中に飛び込まうと決心いたしまし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。で、私は近くへ流れて來た樽を指さしながら、兄（あにき）に注意し、そして自分のしやうとしてゐることを知らせやうと出來る丈のことをやつて見ました。どうと兄（あにき）は私の心持を分つてくれたやうでしたが――どういふものかもう駄目だといつたやうに首を振つて、環付螺釘のところから離れやうとはいたしません。といつて兄のそばまで行くといふこととも所詮出來ませんし、さうかといつて、一刻の猶豫すらない場合なので御座います。そこで、ひどく氣が咎めましたが、兄は兄の運命に任せることとして、私は船尾と桶とを結びつけてゐた繩で自分の身體を桶に縛り付けるとすぐさま桶と一緒に海の中に飛び込みました。

「其結果は私の豫期してゐた通りでムいました。今私自身でこんなことを御前樣に御話いたします通りなんでムいます。この通り私は命拾ひをいたしたのでムいます。それにどういふ工合にして命拾ひをしたかといふことももう御承知なんでムいませうから、この上私が申上げやうと思つて居りますことは皆御分りになつてゐる筈でムいます。私は早くこの御話を切り上げることにいたしませう。私が海へ飛び込んでから一時間かそこいら經つた頃でしてせう。私よりもずつと下の方へ沈んで行つた船は、その時三四回も續けざまに烈しく廻轉して、兄（あにき）は船と一緒に渾沌として泡立つ奈落の底へ眞逆樣に落ちて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

行きました。ひさいきに、しかも永遠に沈んで仕舞つたので厶います。私の體軀を縛り付けて居ります桶は、先刻海に飛び込みました場所さ、漏斗の底さの丁度眞中程よりもいくらか下の方に沈んでゐた時、渦の様子ががらりさ變つて參りました。大きな漏斗の壁面の傾斜の度が一分毎に緩やかになり、渦の廻轉がだんだん〱遲くなつて參りました。泡も、虹もいつか消えて、漏斗の底が靜にもちやがつて來るやうに見えました。空は晴れ、風は止んで、滿月は輝きながら西に沈んで行きます。其時私は自分がモスコオストェムの渦が今迄あつた處より上手の、ロフオデンの海岸のよく見える海の上に浮び出てゐるのに氣付きました。丁度干潮の時刻なので厶います。けれご暴風の名殘でまだ山のやうな大波が立つて居りました。私はストロェムの急流に淡ひ込まれて、數分の間に、漁師達の溜所になつてゐる海岸に押し流されて行つたのです。するさ或船が私を助けてくれました。私はへさ〱に疲れて、もう危險がないさなつた今は、今が今までのあの恐ろしさの思ひ出で口も利けませんでした。船の中に私を救ひ上げてくれた人達は毎日出逢つてゐる仲間や、古くからの朋輩ばかりなのですが、皆私を他界から來た旅人さしか思へなかつたのださうで厶います。前の日まで鴉のやうに黑かつた髮の毛が御覽の通りに眞白になつて居たのですから。顏の表情もその人達の話によりますさすつかり變つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たのださうでムいますから。私は自分のこの話をその人達に話しましたが、誰れもほんとうにしてくれませんでした。それで只今私は御前様に御きかせ申したのでムいます。けれど御前様も矢張りロフオデンの呑氣な漁師達のやうにこの話をなか〴〵ほんとにして下さいますまい。

――完――

らいてう譯

コルシカの旅　モオパッサン

その日から四日を數へて、彼等が蜜月の旅立にマルセールス迄乘る爲の馬車も到着した。その初めての夜の懊惱の後で、彼女は直に夫の燃える樣な接吻と抱擁に慣され果てたとは云つても、尚、より親しい二人の間の交渉は何時も彼女に裏切つて居た。

でも出立の時が近付くに從つて、彼女は以前の賑さを回復したので、別離を惜しんだのは老人丈で、恰度馬車が出樣とする間際に、重い財布をその娘の手に渡した。

『お前の欲しいものをこれでお買ひ……』

それを彼女がポッケットに押し込むと間もなく馬車は出發した。

その夕方ジユリアンが尋ねた。

『お母さんはいくら下すつた？』

彼女はそのことについては忘れて終つて居たので、急いでそれを取り出して改めて見ねばならなつた。それには恰度金貨で二千フランク入れて有つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「これ丈有つたらどれ丈のものが買えるでしよう」

彼女は悦に聲をはづました。

マルセールスの燒ける樣な炎熱を味はつて、一週間の後、アヂャッシオに寄せてネープルスに通ふ郵便船のロイ、ルイスに乘り込んでコルシカの旅に上つた。

凡の出來事が彼女には官能の一部しか殘されて居ない幻の中の出來事の樣で有つて、自分が果してそのナポレオンの故鄕……野生のまゝな矮林や恐しい山と山賊の物語りに富む、そのコルシカに行く旅を行くのだとは未だ思ひ及ばれなかつた。

紺碧に輝く空の下に、燒きもつくさん許りな太陽の熱度に濃く赤くなつて行くかの樣に思はれる海を辷り行く船の甲板に並んで腰を下ろして、うつり變る岸々の綠の眺めをよろこんだ。

「エッリタットに行つた時のことを覺えてらしつて？」

チュリアンは返辭の代に小さい右の耳に輕い接吻をしるした。

艫の方では橈が海を攪き亂して進んで行くと、その後には眼界のとゞく限りは、三鞭酒

の様に泡立つ波の亂れ路の跡が長く殘つて行く。

不意に巨大な海豚が海上に躍り出て、それと見る間に又眞逆樣に沈んで行つた。かすかな恐怖の聲をあげて夫の腕に縋つた彼女は自分の臆病を嘲りながらもその巨大なぶざまな海獸が再び波間に浮ぶのを心待にまつた。それは間もなくそのからくりの玩具の樣な姿を二三度浮沈さしたが見る間に五疋迄仲間を誘ふて、その鐵で出來た樣な鰭をもつて、恰度自分達の木造の同胞を護送するかの樣な態度で、船の前後左右を躍り廻つて進んで行つた。

彼等は何か遊戲でもするものゝ樣に、互に追ひつ追はれつ右に左に現はれたり、或は又可成な輪を畫いて空中にはねては又海をくゞつて歸つて行つたが、不意にはるかな波間に現はれて、餘程隔つたあたりに消えて行つた。

穩に輝いた夕暮は近付いた。海には漣を起す程の風もなく、太陽は手にとる位な近さに見えるアフリカ燒野の方向に横はる水平線の彼方に靜に沈んで行く。暫時經つてそれが沈み終ると、微風と呼ぶことさへも疑はれる位なかすかなヒヤ〳〵しい風が海を渡つた。

船室の惡臭に逐はれて、二人はその夜を外套にくるまつたまゝ甲板の上に過した。間もなくヂユリアンが眠についた後暫時の間彼女は南歐の空に尙一層のきらめきをました星の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

群を眺めて居たが、物うげな汽鑵の音が眠む相にひゞき出して、終には自身もねむりに落ちて行つた。

翌朝は船を清むる水夫の聲に驚かされて、彼女は夫をゆりおこして、共に起き上つた。海は尙その周圍に靜まり返つて居た。然し波の上に横はるキザ〳〵しい尖つた怪しい形の雲の一團さも見らるゝものが曉の靄の中にその灰色な姿を現はして居た。その不確な漠然さした輪廓が明らかになるにつれて、耀いた空に聳えて、一帶の山脈が連り立つのが見られた。コルシカ！それはうすものをかついだコルシカで有つた。

太陽はその高所々々に光を投げて、それらの周圍や麓に陰影を造らへ初めたが、尙島の大部分は深い霧に閉されたまゝに止つた。

潮風に鍛はれた青銅色の顏をもつた老船長が甲板の上に現はれた。

「島の香がおわかりになりまするか」

その聲は三十年から烈風さ荒浪に競つて荒らゝげられた力を示した。

熱帶植物に特有の一種新鮮な香がそこらにたゞよふて居た。

「コルシカの香でムります。美しい女性の様な匂で。私はコルシカ生れでムりまするで、二十年程も土地を離れる様なことも有つたら、屹度五哩位な前から香を嗅ぎわけるここ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が出來るでござりましやう………セントヘレナでは、彼はその生れ故郷のもつて居る香のことをよく話した相にござりまするが………私は彼の一門に屬しまするで………』

老船長は帽子をぬいでコルシカに會釋をした。

そしてその眞率な行爲が彼女の涙を誘ふ迄、はるかの海上を見守りながら、離れ小島の一匹人に終つた世界の大征服者の爲に默禱を凝らした。

『サンクイナイルスが見えまする』

手に手をとりながら二人は老水夫が指ざす方に目を定めた。そこには綠の苔もて蔽はれた高山にとりかこまれた大きな穩かな港に入る前に、船が迂回せねばならぬ斷崖の聳へ立つのが見られた。

『矮林でムります』

老水夫はその綠苔を指して說明を加へた。

場所によつては底迄も見透される位に澄み通つた靑海を橫ぎつて船が港內に進んだ時に、その一連の山々は船の後を塞ぐものかの樣にも思はれた。

アジヤツシオの街は遂に眼界に入り初めた。それは高山の麓に立てられた白色の町で、入江のほとりには伊太利の小さな船が五六艘甜つて居て、ロイ、ルイスが入つて行つた時

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

には旅客を運ぶ爲に艀舟が四五艘漕ぎよせた。

上陸するこ第一に彼女の目に觸れたのは背高な棕櫚の木で、少なからず彼女を喜ばせた。彼等は廣い四ッ辻に近いさゝやかある寂れたホテルに入つて、晝食を命じた。

二人は、吹く風が市街をとり圍む山々に凡て遮られて、爐の中の様に蒸し暑い小さなその町に、三日間止まつた。そしてその後の旅程をはかつて、馬によつてその後の旅をつゞけるここを定めた。

出立の日は明け方に、旅宿のありどころを知らぬ山里への旅なので、必要ないろんな食料を積み込んだ驢馬に跨る案内者を先立てゝ、二人は頑丈なコルシカの小馬に乘つて旅立つた。

澗にそふて走つて居た道は間もなく山の方によつて、淺い谷の間を分けて行く。

耕されてない土地は丸で不毛の地の様に荒れて、燃え立つ様な日光にてらされた丘々は、黄いろく枯れた野草をもつて蔽はれて居た。道には所々にさゝやかな音を立てゝ流るゝ小川が流れて、その道々では歩いたり或は犬程な驢馬や小馬に跨つて、山を下りる人逵に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

行き逢つた。それらの人達がてんでに古い錆びた彈丸ごめの鐵砲を携えて居るのが、いかにも山住の人達の風貌を獰猛ならしめた。

島をつゝんだ熱帶の植物の鋭い香にみたされた空氣の中に、道は高山をうねり〳〵つて登つて行つた。

紫や淡紅の花崗石で出來上つた峯々は、島全體を魔女の宮殿に化して居て、小高い所々からはその麓に果てしもなく廣がつた栗の林が見渡された。案内者は時に絶壁の上を指してそのあたりに散在する村々の名を說ききかした。旅人達は始のほどは何物も見なかつた靄の中から、次第々々に山の頂や、見るも怖しい峯々に、鳥の巣の樣にかゝつた村々を認め初めた。

道は杜松や樫や楊梅や、ヒースや老利兒や、桃金孃や黃楊をぼたんづるの蔓がからんだ間を通つた。路傍にも羊齒や忍冬、迷迭香、ラベンダーや野茨が道を埋めて、その丘全體を青い外套でくりかこんだ樣にも思はせた。

辨當を使ふ折には案内者は彼等を山路をする人達が立ちよつて渇きを止むる自然の泉の傍に伴ふた。そこには岩間の小さな割目から氷の樣に冷い水が流れ落ちて、前に通りかゝ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りの人がそれで掬んだらしい大きな栗の葉もそのあたりに落ち散つて居た。

彼女は今にもはり切れ相な幸福を感じながら、サゴネの灘をのぞんで迂回する道を辿つて馬を走らせた。

その夕景に、故國を逐はれた太古のギリシャの人達に建設されたカルゼスの村を過ぎた時、そこの井戸のほとりには手のしなよく長い優しい腰付のギリシャの娘達が集つて居て、

『今晩は』

とチュリアンが挨拶するのに、遺傳的に音樂的な聲を出してそれに應じた。

ピアナに着いた時には、彼等は中世紀の旅人達の様に、一夜のやどりを乞はねばならなかつた。チュリアンが門を叩いておとのふ間を待つ間にも、さうしたここにも彼女の好奇心は樂しまされて、その心にはよろこばしさが張り滿ちた。

彼等がやどりを求めて訪づれたのは、若い夫婦の住居で、その人達は彼等を神からつかはされた御使をうけるかの様に畏れ愼しんで迎へた。そして彼等は怪しい迄に生命を籠めて彫られた木彫の蟲けらに飾られた古風な家の暖い藁の褥にその夜を明した。

明くれば又そこを出て、深紅の岩が林の様にそゝり立つ迄を辿つた。それらは時と海とに彫られた峰と圓柱と尖閣との凡がそこに集つたかとも思はれた。九百呎の中空に聳ゆる薄い、丸い、くねつた歪んだ異様な巖は、全部がある化身のもの〻力によつて化石せられた怪しい群の様に、木や草や、動物や墓碑や人や法衣をまとふ僧侶や、角ある魔性の者や大鳥や、凡て人が悪夢に見ることのあるあらゆる怖しいもの〻形を現はして居た。

彼女の胸は溢れて、一語も言葉はなさなかつた。然し人は之等の大美の前には何者か何人かを愛せねばならぬことを不確ながらも感じながら、チユリアンの手をとつて、それを握り占めて行つた。

この錯雜した景色を後にして、彼等は青波にその深紅の影をうつす血紅の花崗石の崖にかこまれた入江にさしかゝつた。

『チユリアン』

……………夫を呼びかけた時に云ひ知れぬ力に押されて涙はハラ〳〵と頬を傳はつて流れた。

『どうした？』夫は尋ねた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼女は涙を拭き取つて、尚未だ慄へをおびた聲で答えた。

『何でもないんです。乾度興奮したんです。小さなことが氣になるほど、今私は幸福なのです。』

女が起すヒステリカルな興奮と、些細なことで極度な喜と失望に陷るのを嘲る男には、この感情の激發を解することは出來なかつた。

『手綱がゆるんでるぢやないか』

進み煩ふ道が又つゞいて、暫時すると右に折れて陰欝なオタアの谷に添ふて行く。

それが可成危險に思はれたので、ジユリアンは馬をのりすてることを提議した。彼女は前に感じた發作のあと夫と二人になることをよろこんだので、案內者は驢馬と二人の馬を引いて前に急ぎ、二人はその跡を靜に追ふた。その山には頂上から旋迄一の罅隙が通じて居て、そして一筋の道はその間を通つた。水は氷の樣な冷さを含み、山峽をもれて見ゆる空は奇蹟の樣にはるかなもの〻樣に思はれた。けた〻ましく羽風を切つて、巢を飛び立つた鷲が峽間を出離れる時には、その羽は岩と岩との間にふれる樣にも想はれた。

やがて山は再び開け、道は急轉してこの小川の間を縫ふて進んだ。

氣も心もかろくイソ〳〵と、足下の小石を蹴落したり、怖々と絕壁の下をのぞいたりし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て彼女は前に進んだ。

氣息を切らして、眩暈を恐れて目を伏せながらその後に從つたジュリアンは、日のめの輝く處に登りつめた時に冥府を出た人の樣な息遣をした。

水の滴りを傳ふて彼等は小さな泉を見出した。それには羊を飼ふ者の仕業らしく小さな吸口が付けられて有つた。その泉を取り卷いて苔は敷物の樣に擴がつて居た、その上に彼女は膝を曲げて冷々しい水を掬ぶ間にヂュリアンも膝を曲げて、彼女が啣んだ吸口を爭ふた。

その爭のうちに、二人の唇が合ひ或は別れて、彼等がそれを放した時に、水は再び流れて、彼等の顏に頸に衣服に手に迸り、幾滴かは眞珠の樣に彼等の髮に止つてきらめき、水と共に二人の接吻も流れた。

彼女は戀の激動を覺えた。そしてその口に溢れるばかり清水を含んで、それを夫に吸はしめ樣と試みた。

彼は直に胸を擴げ、頭を伸ばして、息も引かずに熱望をもつて彼を誘ふ泉から命の清水を掬んだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼女は尋常ならぬ思にかられて、ジユリアンに寄り添ふた。胸は波打ち血はおごつて、目は涙をたゝへて柔かにかゞやいた。

『戀しい………』

彼を抱き寄せながらそこに倒れた………。

自分が導き出したその場の口惜しく、不意に稲妻に打たれた様に聲高に歔欷きはじめた。

疲れ切つてその夕方にはエビサに着いて、案内の者の親族の一人の家に入つた。

主人のバオリは輕い咳をする、肺病らしい憂鬱な顔をした男で、二人を粗末な、然し美しいものを蔑す文明に知られぬ山里では決して粗末でない石造の部屋に導いた。そしてそのしやがれたコルシカ訛で彼が彼等を迎へる喜を述べた時に、さほつた女の聲がそれを妨げた。そして大きな眼の日に焼けた皮膚を持つたすらつとした影の暗い小さな女が馳け出して、彼女に接吻し、ジユリアンの手を握つた。

『よく入らつしやいました。お疲れ様』

二人の帽子とショールを片手に取り片付けながら三人を送り出した。

『お夕食の用意が出來るまで、そこらをお案内して………』

さう夫に囁いた。

パオリは直に從つた。さうして二人の間に挾つて歩きながら、村内を案内した。その足取も言葉も同樣に懶げな樣子な上に、又よく折々立ち止つては咳き入つてその度に『冷い風が障つて』と云つたりした。

そのうちにとある栗の木の蔭に彼等を導き入れると、やがて一場の話をその抑揚のない調子で語り出した。

『こゝでマシユウ、ロリがわしの從兄のゼーンを殺しましたゞよ。わしとゼーンがこゝに立つてると、左樣恰度三ヤード程向ふにマショウのわろがうせて

(ゼーン、アルベルタスに行つたらきかねえぞ、行つたら殺してやるからさう思へ)つてぬかすで、わしもおつかなくなつて來て、

(ゼーン、行くなよ、マシユウは屹度お前を殺すから)

と云ひましたゞ。でもゼーンは

(行くよマシユウ………したがお前達は二人共わしを止めることは出來んのかい)

つて云ひましたゞ………なにねそのアルベルタスに居た娘つ子を二人が一所に張つて居

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ましたゞ。するとマシユウはいきなり鐵砲をとりあげましたゞ。そしてわしがねらいを定め得ぬ前にドーンとやりましたゞよ。ゼーンは、左様さ、二呎許も飛び上りましたが、ぢきにわしの右の方に倒れましした。口を開けて居りましたが、も一言も云はずに死んで終ひましたゞ』

二人はその怖しい罪の憶ひ出をそんなにも冷かに語り出す目擊者を呆れて打ち守つた。

『そして殺した人はどんなになつて？』

唆き入つて居たパオリは暫時は頭を上げなかつた。

『うまく山ぢゆうを買收して終ひましたゞ。然し、わしの兄貴がそのあけの年マシユウを殺して終いました。御存知でがしようわしの兄貴はフヒリツプ、パラブレツチ』

『ぢやお前さんの兄弟は山賊だつたの』

落付いたコルシカンの眼はほこらしく輝いた。

『左様でがした。尊敬された山賊でがした。兄貴は憲兵を六人殺しましたゞ。そして六日間食ひ物をたゝれて、到頭ニコラス、モラリと一緒に死にました』

その夜、彼女はその日の途に泉のほとりで味はつたその怪しい血の噪亂の再現を恐れ出

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

した、そして二人が最後に部屋に退つた時に、再び夫の接吻が彼女の理性の凡を吸ひ去ることに思ひ及んで、魂をふるはした。然し直にある大膽さを感じ出した。そしてその夜は實に彼女の爲には初めての戀の夜で有つた。

翌日は、人生の新しい幸福の鍵を齎したその卑しい住居を棄てるのをためらはずに居られなかつた。

然し遂にその寢室に主婦を呼び入れて、彼等夫婦の好意に酬ひる爲ではなく、只何か紀念になるものを殘し度いので、何か好みのものを巴里から送りこしたい希望を話し出した。

長い間、物品を受けることを拒んで居た主婦は遂に

『ではピストルを。ごく小さなのを』

と云ひ出した。

彼女は驚きの眼をひらいたが、若いコルシカの女は何か悲しい戀物語でもするかの樣に、快活なはやり切つた調子で語りつゞけた。

『……でもつてやごの弟を殺してやります』

さう云つてほゝゑみながら、使ふことの出來なくされた片手の繃帶をほぐし初めた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

傷は殆、回復はしたものゝ、白い柔い肉が錐で貫かれた跡を示して居た。

「私が力でもなかつたら、もうすんでに殺されてる處でござりました。やごは私を信じて居りますから疑ひもしませんし、それに病氣ですから短氣も致しませぬが、義弟は私のことについて人が申しますことをすつかり信じて終つて、やごの代に私に嫉妬を致しますんです。又屹度私を狙ひますから……ピストルさへあつたら安全ですし、仇をとることも出來ますから……」

彼女はその武器を送ることを約束して、しつかりと抱きしめて、別れを告げて出立した。

その後の旅は彼女にはおくことを知らぬ抱擁の連續より外には意味のないものとなつて終つて、それよりは山よりも川よりも人よりも、夫のみが世にもかへられぬ尊いものとなつて行つた。

彼等はレグホルン、ゼノア、フローレンスを經て、ある風立つた朝再びマルセールスの波止場に立つた。

榊　纓　譯

靄の帶（小品）——あきら——

動搖の烈しい、不愉快な成田線は又故障が出來たと見えて、もう十分以上かれこれ二十分も停車してゐる。

私は先刻から東窓に凭れて外の景色を眺めてゐるのだ。

汽車が留ると同時に窓の前を反對の方面に疾走した局部的の風は止んだが、靜かにそよぐ夕風は折々來ては頰を、後れ毛をそつと嘗めて行く。それがまた何と冷たい舌なのだらう。

沈むだけ沈んで平になつた私の心の面で印幡沼は今悲しく暮れて行くのだ。太陽が向ふ岸をうねる丘陵の松林の後に落ちて、かつと一時夕映の色に燃え上つたのは少し前のことで、私の列車が此所に着いた時は其名殘の色で林の奥は明るく透いて見えた。稍頭の隙々はまだいくらか薄色に弱く匂つてゐた。が、あらゆるものゝ上に一樣に灰色を塗つていくたそがれがあたりから刻々に這い寄つて、いつかしら活動の痕跡もなく色彩の命を剝ぎ取つていつて仕舞つた。萬物は夕靄で密封された。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

林は其中に只々蒼黒い塊となつて、來らんとする夜の靜寂と嚴肅の住居のやうに沈んで見える。其上を烏が飛んで行く。聲もなく飛んで行く。空は淡い薔薇色で描いた雲の二刷毛を僅に殘して、薄墨色に消えて仕舞つた。暗く光る沼の死んだやうな水には群蘆の影が黒く映つてゐる。ぢつと其影を見詰めてゐると私は何かしら沼の主のことを思はずにはゐられなくなつて來た——

宵々に落ちる蘆の影は沼に吸はれて、眞夜中頃になると、其底に沈む。とすぐ影はみんな沼の主の腹の中にはいるのだらう。主は此度蘆の黒い影を食べてそれで夜毎に肥つていくに相違ない………ふと向ふを見ると闇の中に眞白い帶がぼーつと横はつてゐる。靄だ。靄だ。丘陵の裾をずつと暈して沼の面を滑つて行く幅二間、長さ數町にも及ぶかと思はれる長い〳〵靄の帶だ。あの松林に住む白衣の女神達がなよやかな裳を長く背後に引いて今一列を作つて靜々と降りて來たのぢやあるまいか。

空はどうやら曇つたらしい。晴れた夜空のどこか青味を含んだ黒さではなく、只もう陰氣な險惡な黒闇が渦卷いて、小さな星の煌きも洩さない。魔物でも潜んでゐるやうな奇形な黒雲が低く、重さうに垂れてゐる。風は全く死んで仕舞つた。動くものは何一つとしてない。鳥も啼かない。羽音も聞えない。今、沼に住む大小、無數の魚といふ魚の鰭は魔術

にでもかかつたやうにむつとしてゐるのだらう。ああ、今、この闇の中で雁が一聲叫んだら、さうして羽音高く落ちて來たら………

すぐ前の線路に添つて往還の小さな土手の上に沼を背にして石地藏が立つてゐる。こゝに何年、孤獨、寂寞の情趣を味い盡したやうに冷えに冷えて立つてゐる。沼の左側に遠く、廣く續く刈田は東京近傍のやうに畔の並木がないので、ずつと平坦に打開けた中に目立つてゐる、一本松や、二本松は今しがた迄夕霧の中からだん／＼に見え隱れしてゐたのだが、もう深い夜霧の奥に全く沈んで、眞黒に見えるばかり。下弦の頃の空はたとへ晴れてゐやうとも、まだ月は懸りさうもない。

沼も、丘陵も、野も、白かつたあの靄の帯も無邊際な眞暗の中に葬り去られやうとするとき、只つた一つ向ふ岸に灯がほつちりとついた。消えさうになるかと思ふと、烈しく瞬いて、また靜かに光つてゐる。

其灯が水に映つて金色の細棹を眞直に立てたのであゝあんな處まで沼だつたのかと驚く位、日は全く暮れて仕舞つた。

雜木林の中の小家にも豆ランプがついた。出水の後の何れも張替へたての障子なので殊がくつきりと浮き出て見えるのが、疎林の間から見る故か妙に氣持がいゝ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

向ふ土手を薄暗い小提灯がぶら〳〵と搖れながら通る、何て寒さうな情ない光なのだらう。空車の音が次第々々に消えて行く。

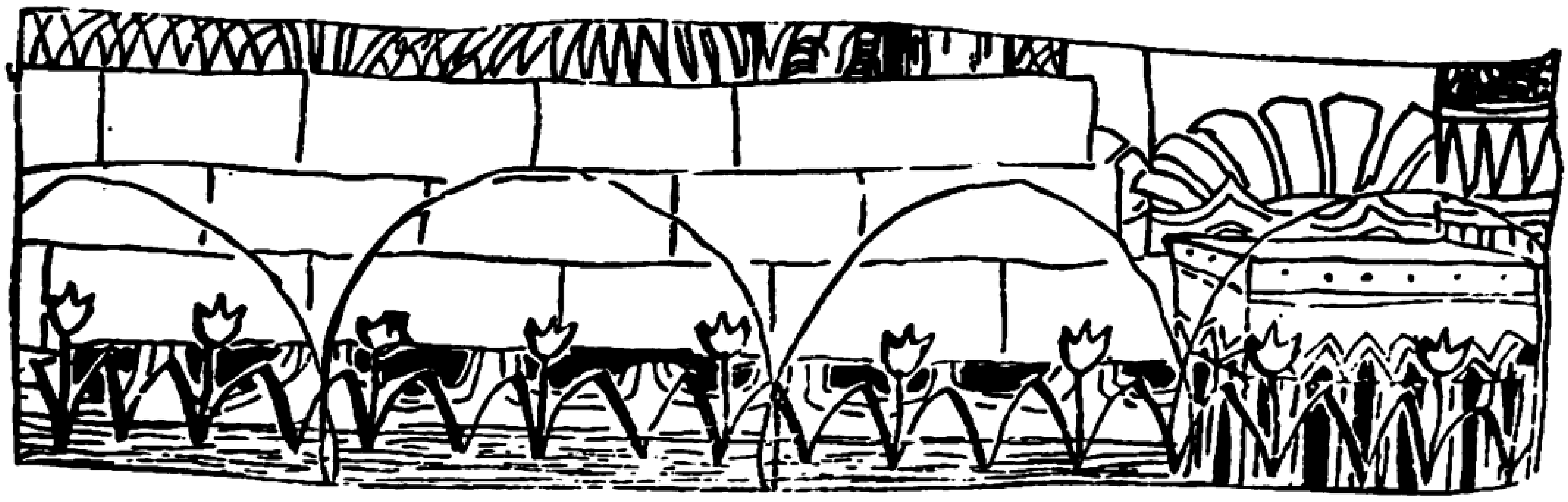
何處に居るのかも忘れてゐた私は自分の頬が夜氣に觸れて氷のやうになつてゐるのに氣付いて顏を引くと同時に窓をしめた。向き直ると天井に懸るランプの鈍い光を半面に浴びて腰掛けてゐる數人の乘客の曲りには、不安、焦慮、輕い憤怒といつたやうな穩かならぬものゝ影が動いてゐる。中には不意と立つて荒々しく窓を開けて、上半身を乘出すと何か怒鳴る卑げな男もあつた。けれど幸にも私の心情はこの眼の前の光景を只ありのまゝに見取つた丈でそれが爲めに破られるほど淺瀨で動く粗大なものではなかつた。でも私はなほ自分を保護しやうと窓の硝子越しに斜に見える停車場の釣燈籠を見つめてゐた。この寒村のメランユリーを一處に集めたやうな六角燈籠、それをぢつと見つめてゐると、何だが生れぬ先きの遠い遠い故鄕の母が頻りに私を呼んでゐるやうな、なつかしいやうな、心細いやうな、遺瀨ないやうな、泣きたいやうな氣持がして、五體が次第々々に發散していくやうだ。

私は眠くて、眠くてたまらなくなつて來た。

快い怠さを覺える眼蓋はもう半落ちてゐるのだ。兩手を袴の中に入れて眼を閉ぢると、しばらくは懷中時計の音が聞えてゐた。

……完……

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



青鞜社詠草

白雨

火の中か水の底にか何れにか片よりてあるわが心かな

泣き涸れし眼に冷やかに残る君涙さそはず寂しげに見る

かへり見て我が胸裏の寂しさをしみ〴〵と思ふ貧しく住む身

或る時は心の限りかたむけてありとしきけど更にかひなし

寂しさもおちきなさをも思はさる國にゆかなむ花あらばよし

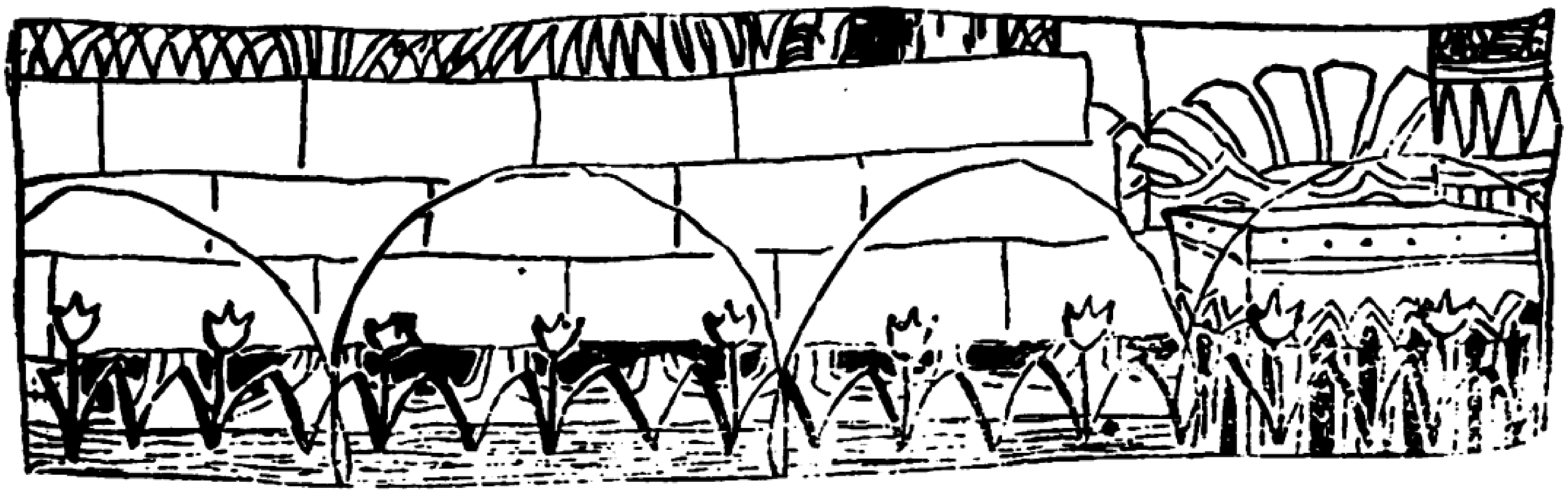
何となく夕雲を見て磯にあれば涙流るゝ君とゆかまし

此頃を薔薇など植ゑてまぎらす寂しき心かなしき心

おほけなく生くよと思へばいら〳〵と落ちつかぬ日を重ねて暮れし

いつくにか一人遁れて泣かまほしあはれ行くべきところはなきか

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



麻痺したる人のやうにもひゞかざる死人のこゝろ我が生をたつ

美しく別れなむこそいふ君に絆たゝれず尙泣きてあり

叶はじとて遊女あつかふ如くにもいと安〴〵と戀うつす佇

夫去りて葬出せし其日より新戀い人を得たる悲しみ

何といふ男心の頼みなき遊びに倒たる戀もするかな

他所にありてかへれば犬の居すなりぬ物足らぬ部室に夕雲を見る

噛み切りてうせしよな縄はまつほりて緋なるダリヤの幹にかゝれり

何處にゆきしあのたゝンモが似しといふメキシコ種の黑き小犬よ

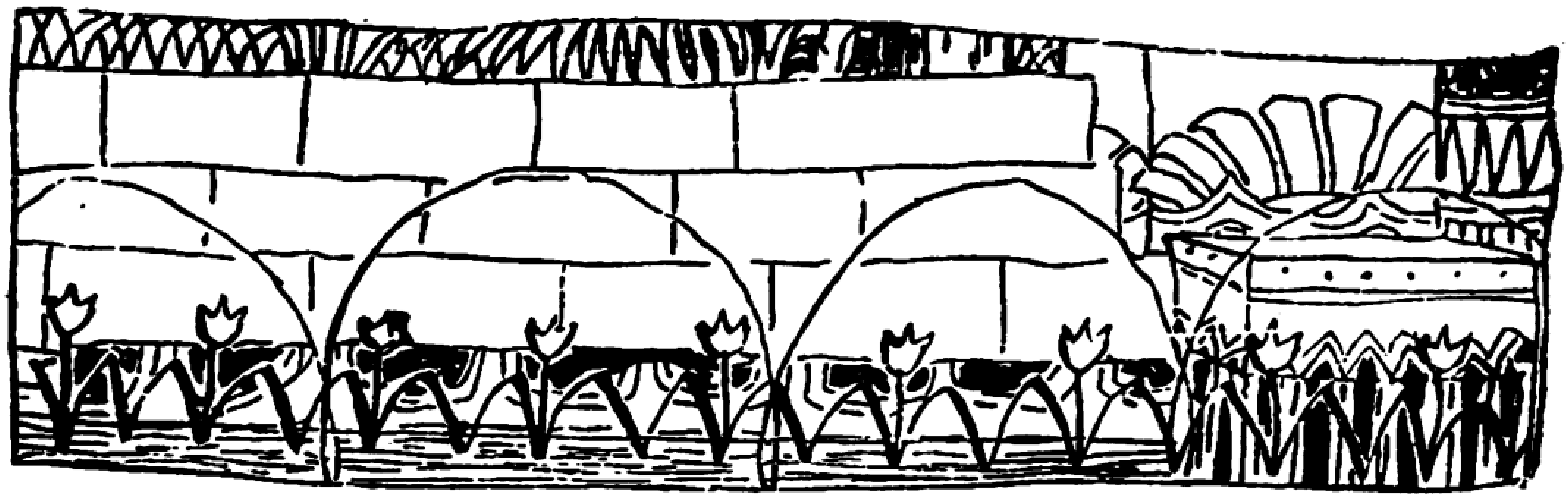
岩淵百合

かの彩のさびしき色をなつかしみなつかしみ聞く戀の三味線

投げ出せし空虚のこころこの心白刃をまへに香料を焚く

あまりにも弱きこころを自らなほあきたらず蔑みて見る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



こころよく遠鳴る海をききながらココアを飲めばこころくつろく

この戀を紡くおもひてうしろよりはかりごとするおろかしき人

ねじけたるコスモスの花二三輪眼子（まこ）のことくそらなきをする

はしたなき振舞ひさへも憎からずおもふこころに冬の近づく

千條の簾のなかに身をなげしはかなさよりも秋の過ぎゆく

語らひて歩めるひまにそと摘みし秋くさなれば捨てかたきかな

山田澄子

わが思ひはなやかなれどゆくゝ道は清き水のみ細くながるゝ

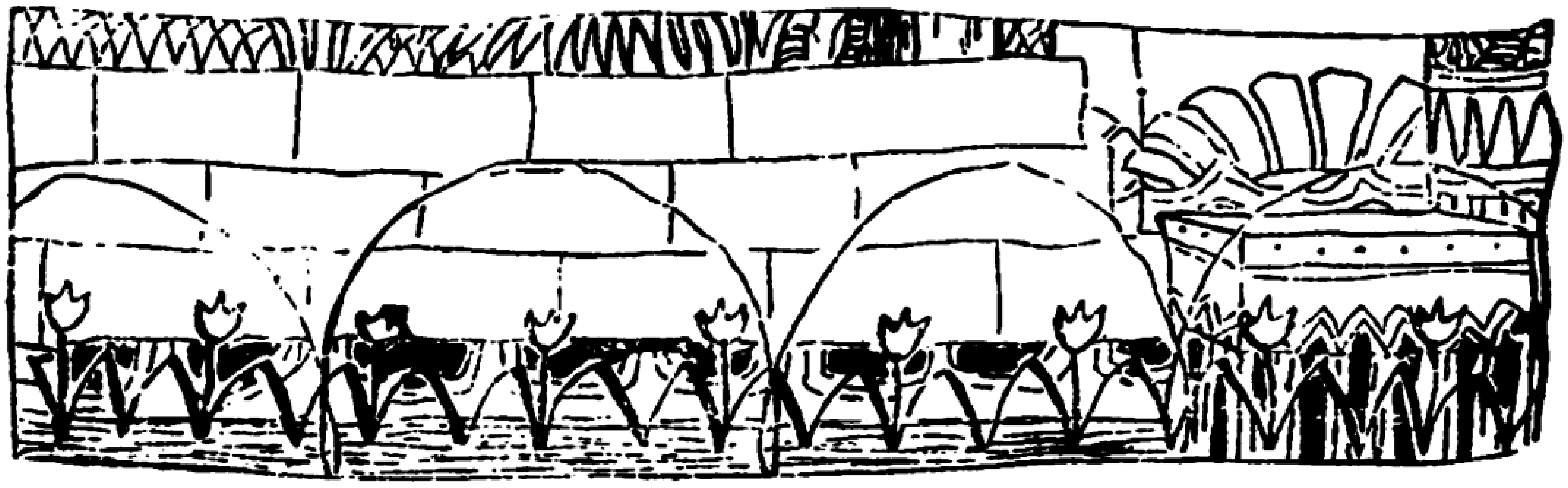
十六夜の六條わたりこれやこの源氏の君の愛でし月かげ

涙かと逢坂山の關跡の野菊の露にぬれてけるかな

東山京が抱ける思さもいたくよしばむ夕月夜かな

我が涙瞬間（たまゆら）にしてあざけりの笑み浮び來る日となりしかな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



岡井禎子

戀ひ死なんと苦しき熱を痛みながら笑みし少女は誰にかありけん

この園はとげある木のみ植ゑられぬされどなつかしばらの咲く時

身を捨てにゆく人よりもはかなけれ人を尋ぬるさすらひの旅

ある時は心にもなき笑みつくりおのが身をさへ欺けるわれ

児島てるを

やるせなき身を籐椅子に投げかけて沖の白帆を眺むる夕

秋の野に名もなき花をことさらに手折る性こそ泣かまほしけれ

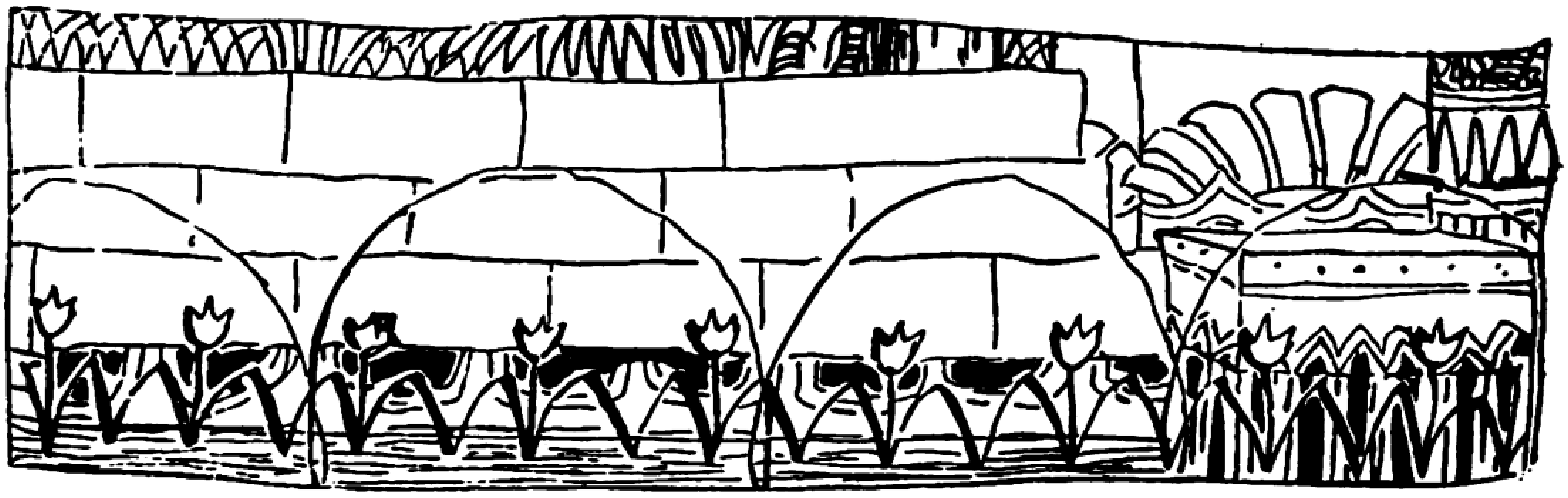
泣くべしと身をせめらるゝ心地しぬあはれ野菊のこのみだれやう

秋の夜の月の光りにさそはれていでし少女を君は夢見む

この胸にうつる人なし歌もなしさびしき心こほろぎを聞く

き

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



母となる女を罵りぬされどあゝみどり子の頬に吻づけなしぬ

男知りし女悲しやしめ〴〵と乳房撫でゝはさびしくも笑ひ

あのやうな君なりしかどわが前に涙などせり別れてしまひぬ

我が思ふ如くに君を戀ひしたふ女もなつかし秋山にたてば

夕焼の日本アルプにスカンヂナビヤのアルネ戀せし娘なりしかど

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初戀 ——藤岡一枝——

唯、譯もなくその女を見るのが望ましくつて、その女の傍を去りかねるやうな思ひに迫られるのを戀と云ふのならば、私の初戀は恐らく、おいとさん——その女の名でした、——おいとさんなのだつたでせう。

おいとさんは其の頃廿四とか云つてました。背も秀削として女としては高い方ですし、色の淺黑い細面の、鬢も前髮も詰り加減な銀杏返しに結つて、始終鯉口のやうなもの許り着てゐました。

私が初めておいとさんを知つたのは、もう十月の末で、袷に羽織を着ても、袖口が搔き合されるやうな時でした。團子坂上の貸本屋で、その頃夢中になつてゐた鏡花のものを、何かしら借りたいと思つて、軒燈さへ點いてゐない、腰高障子を氣味惡く啓けますと、內は薄暗い、油煙の立つてるやうな三分心の洋燈の下で、若い女が一人、紫や紅や白の瓦斯糸を合せて、羽織の紐を編んでゐましたが、障子の啓く音にヒョイト貌を上げて、『被入い』と低い聲で云ひました。目の際立つて奇麗な、それがおいとさんでした、坐つ

てゐる傍には、出來上つた紐が幾個か置いてありありました。

『鏡花のものを何か』

『鏡花さんのもので御座いますか』と、覺束なく云つて、膝をはたいて立上ると、

『恐れ入りますけど一寸お上りなすつて御覽下さいまし、鏡花さんのもの は此處に御座いますから』と、脊に筆太で汚らしく、新小說、文藝、と書いたのが並んでる上の段を指して、瓦斯双子の袢天の襟を引張り乍ら莞爾しました。隅隅迄燈が届かないのに氣が附くと、周章てゝ洋燈を持つて私の傍に立ちました。

『照葉狂言、誓の卷、湯島詣で』と、おいとさんは私に氣を兼ねるやうな目遣ひをし乍ら小聲で順々に表題を讀んで行きました。まだ知らない小說に對する悦び、斯う云ふ本の中は一體甚麽麗はしい字が綴られてあるのかと、嬉しさに心をときめかせて、おいとさんの迷惑も關はずに一册〳〵、拔き出しては口繪や頁を繰つて、冷たい板の間に、素足の儘立つてゐましたが、漸つと高野聖と辰巳巷談とに極めて、私は初めて借りる本屋に對するやうに、自分で編んだ紅い毛糸の巾着から、銀貨を出してソツとおいとさんの膝の傍にさし出しますと、

『それぢやあお預りして置きます』と云つて洋燈の臺にしてゐる踏臺の上にその銀貨を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

載せて、長火鉢の火を掻き立て乍ら、『お寒くなりました、まあお當りなさいまし』と笑ふ度びに、心持ち黒い齒に、左の奧で一寸みえる、八重齒が目立つて愛嬌になつてゐます、それでも幾等おいとさんが笑つて呉れても、何だかその笑貌に連れて、此方も一緒に笑はずにはゐられないと云つたやうな、そんな華やかさは、何處を探しても求められませんでした。

『羽織の紐をなさるの』年には老せた私は無遠慮に話しかけました、一つにはおいとさんと話してみたい心からでした。

『えゝ、馴れないもんですから』と形ばかりの返辭をして、ちいと許り出來てゐるのを二つ三つ膝の上で揃へて撫でてゐました。

私は、その歸りにもおいとさんの事を思ひ續けてました、薄暗い燈の下で羽織の紐を編んでる女、それがヒヨイと貌を上げた時の樣子が、目について放れません。

私はその頃、琴と裁縫の稽古に毎日通つてました。彌生町の宅から根津の師匠の許へ行くのに、何日も歸りには廻り道をして、團子坂のその本屋に何かしら借りに行くのを樂しみにしてゐましたが、それでもおいとさんが居る事は少なくつて、大抵はそのおつ母さんだと云ふ、六十位の、白髮許りを切り下げにした、恐ろしく貌の嚴い人が、店に仕事をし

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て、目鏡越しにヂロリとみては、愛想もなく本を投出すやうにして呉れました。それが何日か笑ひ貌でもして迎へて呉れるやうになつた頃は、もう私はおいとさんのゐる、店の次の間の六疊で、せつせと羽織の紐を打つてる前に坐つて、何かしら話してるのが極りでした。おいとさんは斯うして私が來るのを只笑つてゐて、

『貴女はお三味線はなさらないんですか』

『えゝ、お琴ばつかりよ』

『ようござんすね、お琴は上品で、今何をなさつて被入います』

『住吉』

こ、這麽話しかしませんでした、又その外話の種のあらふ筈はないんですけど、私は何かしらおいとさんに聞いてみたく、あれや、之れやと話の糸口を引出すのに苦しんでました。

『此の頃此方へ被入つたのね』

『えゝ、元は濱町にゐたんです』

『何して、矢張り本屋をして』

『いゝえ、其様もんぢやないんです』と、笑つて了ひます。直ぐ下の菊に、日曜などは人が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゾロゾロ通つて、樂隊は丸で拵りでゞもしてるやうに聞えて來ます、窓を啓けると、目の下に根津から遠く上野の方迄一目になつて、その頃根津にあつた藍染座の幟などが、薄黒く見えてました、窓の上には縁日もの丶草花や、吝な欅や銀杏が鉢植にされて並んでゐました。おいとさんはその頃まだ娘だつたのでせう、三十恰好の人が時折見えましたが、それは兄さんだと云つてました。而してお母さんの口から、濱町で待合を出してたやうに私は聞きました、それが何の爲めかこんな場末に引越して參つたんです。おッ母さんは、おいとさんの話を何日もする時には、屹度さも歯痒さうな口吻を洩らします。種々、生花からお茶の湯から、琴も三味線も仕込んだのに、何一つそれを活かして使はない、と云ふやうな事も云ひます、而してあれ位の器量であり乍ら、些少も物に望みを持たない、と云ふやうな事も云ひます、温和しすぎる、とも云ひました。

おいとさんは、私が頼んだ牡丹色の絹糸で、羽織の紐を打ち乍ら、

『絹糸はした事がないもんですから、這麽にズル〱辷つて、今朝からかゝつてまだ片方しか出來ないんですよ』と云つて、水仕事に荒た細くない、指に、牡丹色の絹糸を絡ませたり、解いたりしてました。丁度その時です、その兄さんと云云ふ人が外に三人程人を連れでドヤ〱入つて來ました、おいとさんは輕く頭を下げて、立上ると、その人達の下

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

駄を三足とも持つて勝手の方へ廻して了ひました。さうすると程なくおッ母さんが、

『おいとや』と顔を出して、頷いてみせました。その目の色には、明かに私のゐるのを厭ふやうに思はれましたから、私は何ともしれぬ不安と不快の念に誘はれて、おいとさんが止めるのも關はず振り切るやうに表へ出て、ホツとしました。朝から雨を持つた雲が、何日の間に降り出したのか、もう道は可成濡れてます、兩側の灯が濡れた道へ流れて、寒い風に、人は足を早くしてゐました、私は駒下駄で傘もさゝずに團子坂を降りかゝりますと、晝間の賑かなのに變つて、人通もない程森としてます。而して簀の子で圍つた間からは、二三の職人が、枯れた菊を脱けには、新らしいのと取かへてるんでせう。白菊や黄菊のヒヤリとさせるやうな、高い匂ひが鼻を打つて、襟や袂のとれたおかるが、青白い瓦斯の光に、物凄く見えました。私は立つて何日迄も覗いてましたが、ふいと今迄氣がつかなかつた、往來に近い處にある山崎街道の場の人形と顔を合せるやうになつて、私は思はずゾツとしました。その途端に、『あら此處に被入つたんですか』と云ふ聲が耳傍でして、澁蛇の目の傘を傾けたおいとさんが立つてました。

『えゝ』と、私は這麼處を見られたのが恥のやうに思はれたもんですから、スタ／＼歩き出しますと、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『濡れますよ、傘を借して上ませう』と、無理に持たしましたが、私はこの場合、借りると云ふ事が奈何云ふ譯か厭でしたから、

『いゝえ、いゝんですく』と周章てゝ、暖たかくなつてる、その柄を又おいとさんに持たしました。

『さうですか、でも濡れるとおッ母さんにお叱られでせう』と、この場のお義理のやうに云つて、『ぢやあ其處迄御一緒に行きませう』と、おいとさんは私に傘をさしがけて、近いお湯屋迄一緒に歩きました、すらッとした背の上に足駄を穿いたおいとさんと並んで、如何にも私がみすぼらしく思へてなりませんでした。而して私は、おいとさんの身に、何か或る恐ろしいものが蔽ひ被さつて來やしまいかと、それ許り思ひ續けてましたが、肝甚のおいとさんは苦も無さゝうに、石鹼箱やお白粉と手拭を持つて、磨硝子の明るい戸を開けて入りました。

私は、賴んだ羽織の紐が出來てゐるだらうとは思ひ乍ら、おッ母さんや兄さんの顏を見るのが厭で、一週間程と云ふものは、門口丈見て中には入りませんでした。雨の降つた日に珍らしく三味線の音がしますから、ソッと覗いてみましたら、おッ母さんが彈いてたや

うでした、私は恐く物のやうにそこを退くと、二三間馳け出して行つて、又振り返つてみました。

私の家へ來る髪結と、おいとさんの結つて貰ふ女と一つでした。

『なか〳〵好い器量でさね、だけど餘り温和しすぎて困るんですよ、ですからおっ母さんが癇癪を時々起してね貴女、何しろあのおっ母さんが附いてるんですから、幾等娘だからつて今迄何をしてたか分りやしませんよ、それは待合もしませうし、鳥屋のやうなものもしたんでせう、とてもあのおっ母さんには堅氣の考へなんか出やしないんですからね』と云つて、姉の島田の元結をしめてゐました。

それでも私には、おいとさんは少しも汚なくない、あゝして内職迄するやうな感心な女としかうけとれません。私は宅へ一度被入い〳〵の十遍も云つて、或る晩、おいとさんは出來上つた紐を納めた歸りに初めて家へ來ました。その時に私の紐も持つて來て呉れました。思つた程に上手でなく、糸もしまつてはゐませんでしたが、おいとさんのして呉れた品として、私には何よりのやうに思はれました。おいとさんは洗髪を下げて、一寸中程を黒元結で結へたまゝ、銘仙の古い縞の着物に襟がかゝつて、糸織の前掛をしめてゐました。

出來る丈私は勉めて話の種を探しましたが、皆んなおいとさんには、笑つてツッと逃ら

れるやうな返辭許りでした。

『貴女も小說をお讀みになつて?』

『いゝえ、余り好きませんから、でもたまには講談本を少しづゝ』

『さう、甚麼物でせう』

『牡丹燈籠や毛谷村六助なんか』

『面白くつて、おいとさん』

『えゝ、隨分いゝんですよ、それに怪談物の方が面白うござんすからね』

こんな事でお終ひになつて終ふんです。而しておいとさんは三十分程して歸つて行きました。私は何だかその後が、如何にも本意ない返し方をしたやうに思へてなりませんでした。

『彼麼大きな女が何しに來たんだい、馬鹿だね』之は兄からでした。

『あの女なの、おいとさんつて、一寸奇麗ね、だけど隨分下品だわ』姉は嘲弄の目を持つて私をみて、斯う云ひました。

『貸本屋の女なんかと何です、父樣がお聞きだつたら叱られます、もう之からは行く事もおよしなさい』と、小さい乍らも、官吏の妻として威嚴を保たうとする母は、さも私

がおいさんと親しくしたと云ふ事が、家の恥辱のやうに云つて憤りました。

『それに元は待合をしてたつて云ふぢやないか、お前も余り考へのない、何ですねえ』と附け足しました。

斯う云ふ風においささんに對する私の周圍の人は、誰でも皆ないゝとは云ひませんでした。それから私は本を借りに行つても、返しに行つても、怖々立ちよる許りで、進んで上ると云ふ氣にはなれませんでした。それに多くはおつ母さんもゐますし、兄さんと云ふのも大抵宅にゐまして、おいささんは臺所で働いてる許りでした。

それでも一度、私ば裁縫が出來上つたので、早く家へ歸るやうになつたものですから、大きな風呂敷包を持つて行きますと、店の長火鉢にも、灰許り冷たく固くなつてるやうでして、部屋一ぱいに對し込んだ太陽に、大柄な更紗の布團が干してありました。誰もゐないやうなので、私は二三度咳拂をしたり、下駄で土間をカタ〳〵させたりしましたら、

『お客樣？』と、云つたらしい聲がしまして、如何にも物憂さうな樣子で、おいささんが何處からか出て來ました。今迄泣いてゐたのか、目が眞赤です、而して前掛にも汁の汚點らしいものが澤山出來てゐます。

『あゝ、被入いまし』

殆んど余儀なくしたやうな笑方でした。

『貴女お一人?』

『えゝ隨分久濶く被入いませんでしたね』

『えゝ』

『お上りなさいまし、誰もをりませんよ』

『さう、いゝの』と云ひ乍らも、私はズン〳〵上つて了ひました。

『奈何かなさつたの』

『私?』

『えゝ』

『いゝえ』と云つて、窓へ腰かけましたから私も同じやうにして、

『だつて目が眞赤なの』

『さうですか』と、とつて附けたやうな返辭をされて、私は何ともしれずに恥かしい思ひをして、そのまゝ押默りました。部屋にはしかけた儘の粗末な紐を打つ道具が置いてありました。

『何かしかけて被入つたんでせう、編んで被入つたの』

いゝえ、もう這麼物は止さうと思ふんですよ、でもね、持つて來たの丈はしませうと思つて、斯うやつて出してみたんですけど、眞實に何日迄經つたつて、這麼事をしてちや有達の上りつこはないかもしれやしませんやね」と私に云ふ譯でなく、打捨るやうに云つて頤を襟に埋めてゐましたが、私の風呂敷包に目をつけて、

「お裁縫のお歸りですね、拜見さして下さいな、何がお出來になりましたの」

「だめなんです、可笑しいのよ、屹度笑はれるわ」と、云ひ乍らも私は、自分の手で出來上つた春着を自慢半分に見せたくつて包みを解きますと、華派な紫の矢絣の上着と、白地に墨繪の鳥が飛んでる下着とが、鶸色裾の廻しを引き立てゝ、目の覺めるやうに其處に擴げられました。

「オ、奇麗」と、おいとさんは飛びつくやうにして、

『貴女がお見立てなんですか、お上手ですね」と幾度か裏や表を返してみてましたが、軈て私の體にかけてみて、

『早くお召しなさいまし、而して寫眞をお撮しになつて私に下さい」と半分は獨言のやうに云つてます、而して又元のやうに丁寧に包んで、隅に置きました。久潤くするとおいとさんは、膨らんだその布團を、バッバと埃をたてゝ、疊み初めました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「お母さんは何處かへ被入つたの」

「お墓詣りに行つたんですよ、月の一日と十五日には屹度行くんですの、あゝ見えても信心家なんですもの」と押入れを開け乍ら云つた言葉が、如何にも空々しく聞えてなりませんでした。臺所へ行つたと思つてますと、すぐにお小皿にお多福豆を盛つて來まして、

「召食りませんか、此度少し這麼事もしますんですよ」と楊子にさして、自分も食べながら私にも取つて呉れますが、何だかその眞黑な大な豆が氣味惡くつて、咽喉には通らないんです。

「貴女がなさるの」

私は話の間が途切れた間の照れるのが辛さにかう云ひましたら、

「いゝえ私ぢやないんですよ、母が煮ますの、白いお砂糖許りで一日も二日も氣永く氣永く煮ないと不可ないんです」と張合も何もないやうな云ひ方をします、私は何時迄も此處にゐるのがおいとさんに氣不味く思はれやしまいかと云ふ懸念から、氣を利かす心算で早く歸る事にしました、歸りにみますと、店の傍にお多福豆や隱元豆が、少し許り出てゐました。歸り道で、お母さんと兄さんと云ふ人とに逢ひました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

その年の冬は莫迦に寒くつて、殊に市の立つ頃には雪も二三度降つた後でした。私は淺草の觀音さまに年の市が立つた晩、母に連れられて行きました。結ひ馴れない島田の重さと、極り惡さと、寒いので、私は一時も早く家へ歸りたい、と人に押され乍ら、母に强請つた鬼神お松の羽子板を抱いて、仲見世迄來かゝりますと、半襟やの前に立つて、釣るしてある半襟をぐる〳〵廻してゐた女が、何か連の男に笑つて物を云つた拍子にちらつとみた横貌がおいとさんでした。

『あッ』

私は思はず云つて立ち止りましたが、二人は氣も附かずに寄り添つて、その儘歩き出しまして、軈て鳥やか何かに入つて行きました。

『誰だい、お前』

『おいとさんだと思つたの』

『へえ』

母はそれ限り、言もおいとさんの話は云ひ出しません。仲見世の石疊に日和下駄の音をさせて、私も何にも云ひませんでした。寒いと思つたのが、何日かバラ〳〵と霙交りの雨が降つて來ました。私はおいとさんに今迄噓を云はれてゐたやうに、腹が立ちました、而

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

してもう決しておいささんの家には二度と再び行くまいと心で極めました。

程經て、今迄いゝ方許りみてゐた私は、此度はおいささんの裏ばかりみるやうになりました。人は兎角種々と云ひたがりました。おッ母さんが強たか者で、賭博の宿迄したと云ひますし、以前はそれで待合を止めたやうな事も云ひます、兄さんは眞實なんですが、仕方なしの放蕩者で、その内の遊び仲間の一人が、おいささんに無理を云つたとも聞ました人は尾に鰭をつけて、おいささんも、おッ母さんも、兄さんも、家中揃つて惡者のやうにして了ひました。私はもう可怖くつて、立寄る處か、家の前さへ通らないやうにしました。

暮ももう數へ日になつた頃おッ母さんがヒョックリ來まして、私が買ふとも、借りるともつかずに、私の手許にまだ置いてあつた『湯島詣で』を、奈何する心算かと聞きに來ました、私は見るも可怖い氣がして、女中にお金を渡して買ふ事に極めますと、一寸歸る時の樣子が恐いもの見たさに障子の隙から覗きましたら、別に見すぼらしいなりでもなく、シャン／＼歩いて歸つて行きました、それはもうたてた門松に細い雪が降つて、如何にも積りさうに、空は朝から灰色に曇つて、頭が押へつけられるやうな、凡てが薄墨色に包まれて終つたやうな或る日でした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

それから二三日して、おいとさんの家は何處かへ引越してしまつたと聞きました――。

幼い私がおいとさんに對する知識は之で盡きてゐます。丁度ボロ〳〵の布切を擴げてみるやうに、處々に手擦れたり、千切れたり、横糸がぬけてゐたりするやうなもので、只、朧ろげにしか分りません。

おいとさんは、私には一言も云はずに何處かへ行つて了ひました。その行く先は恐らく誰にも知らさなかつたのでせう、知つてゐるのは親子三人と、その内の一人だつたかもしれません。おいとさんはもう三十二三になつてゐるでせう。而して私にもおいとさんはもう過去の人となつて了ひました通り、おいとさんには、私などは殆んど、影もなくなつてゐるでせう、それでもおいとさんを思ふ度びに、仲見世で逢つた夜、おいとさんの銀返杏しにかけてた銀色の根掛けが、店先の燈火に、キラ〳〵と光つたのが、忘れられないものゝ一つになりました。

――をはり――

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

日記より（牧野靜）

六日――――：

雨たらうと思つたのに案外な上天氣。和らかな日影が椽側の障子一ぱいに射してゐる。背椽の方の障子一枚開くと眞青な松の梢と高い晴れた空が覗かれる。波の音も聞こえぬ。サフランの小さい花がたつた一つ咲いてゐる。

穩やかな、靜かな朝だ。何となく起きて見たい。枕の上に手をついてそつと上半身を起して見る。少し頭が重いばかりだ。暫く坐つてた。朗らかな目白の囀りが何處からともなく聞こえて來る。

來さうにもない手紙を待つてたけれども駄目だつた。

午後お隣りのお婆さんの歌が始まつた。夷隅山のお三狐にもう、十年近くもとりつかれてゐるのだ。七十越したお婆さんが體もろくに動かせない位痛み疲れてゐながら食べるものは二人前だと聞いて驚く。時々機嫌のいゝ時には歌ふのだ。私たちの知らないやうな、古い歌ばかりだ。毎日々々たいして悪くもない體を床に横たへて無爲に暮す私のさびしい今の心持ちでは、お婆さんの歌は非常に面白く聞かれる。

「わしが歌ふたら、大工さんが笑ふた。
　歌にかんながかけられよか」

なんて、おもしろい調子で歌ふ。

「婆さんが沈み入るごとある聲出して歌ひなさるけん、私ともうつかり、歌はれまつせんや」

若い、お婆さんの養子は高笑ひしながらお婆さんを冷やかしてゐる。お婆さんの細い聲がクドクド何か云つてゐる。暫くして畑にゐた祖母が垣根越しに養子と口きいてゐた。

「へえ、只今御愁嘆の場で御座います、もう、近々お逝くれになりますげなけん〱、そのお別れの口上で〱……」

さきさく者の養子はあたりかまはず笑つた。祖母の笑ひ聲も聞こえた。

今日も、平穏無事な一日が靜かに暮れて行つた。

八日――

午前に近藤さんが來た。昨日からの暗い悲しい氣分がまだ去らないので折角來たのにろく〱にお話もしなかつた。何時もながらの、私の我儘は知つてゐるのだから別に何とも思つてやしないだらうけれども後で何だか氣の毒な感がした。我儘と云へば私の此の頃の激しいわがまゝは自分でもはつきり分つてゐながら制する事が出來ない。どうせ、永いこと、家にゐる體ぢやないのだもの、とついさう思つてしまふ。それでも私に欺かれた家の者はいくらか力づいたやうだ。そして私の我儘も割合に何かと云はないでゐる。うまく、欺きおほせた私は、人々のあさましい態度と淺果な考へを冷笑してやり度いやうな皮肉な考へと一緒にまた淡い悲しみと寂しさとを感ぜずにはゐられない。そしてまたそれ等は代る〲に私の苦しい頭をかきまはすのだ。懐かしく戀しく、何時までも去り度くなくてはならぬ筈の父母の家を私は、再び逃がれ出でやうとのみ隙をねらつてゐるのだ。何と云ふ不幸な私だらう。

然う一時の、間に合せの妥協によつての平和が何時まで續かう。一時の平和を求めて後々まで苦しむより、また、死によつて強く自己の道に生きる方がどの位、ましだか知れない。些の理解もない人々の中に立ちまじつて目を瞑つて物質的の、若しくは肉體的の安逸に耽るよりは、少しでも多く、自分を理解して呉れる人々と共に苦しい、辛い生を、續ける方が、いくらいゝか……

私は今日まで可なり、眞面目に、熱心に、少しでも、私を愛して呉れる父や母に、周圍の人に、本當の私を理解して欲しいと思つて苦しい努力を試みた。然しそれはみんな、無駄な努力だと知れた。私と、兩親との間は、あまりに違すぎる。私が、眞面目に私の本體を臆面なく、人々の前に、さらけ出さうとすれば、父も、母もみんな、目を瞋つて、見

やうとはしない。そして、私は、わざ〳〵、醜くい本體を人前にさらし、間違つた道を歩いて行く馬鹿者だ、世間知らずだと、ばかり罵られる。眞面目な私の苦悶は、それにつれて動く感情のうつりかはりの激しさに、氣狂ひと冷やかな笑を浴びせられるばかりだ。

十重廿重に縛められた因習の繩を切つて自由な自己の道を歩いて行かうとする私は、因習に生きてゐる、兩親やその他の人々の目からは、常軌を逸した、危險極る、道を平氣で行く氣違ひとしか、見えないだらう。世間並みの道から外れた者は、矢張り、氣違ひか、馬鹿の仲間だらう。到底私など世間からは容れてもらへない人間だ。だけど、今になつて、兩親や周圍の者が狼狽して、もとの生地に直さうとする、注文が無理なのじやないだらうか？私は一度開いた目を閉ぢて、大勢の、めくらと一緒に生命のない、卑怯な馬鹿な生き方はしたくない。

どうせ、私は父の子じやない。母に敎育された子じやない。

安樂や幸福を願へばこそ、何かゞ恐くなつて來るのだ、はじめから、苦しむつもりで苦痛の底に潜んだ何物かをさがすつもりで、かゝれば何にも恐れるものはない。すべての迫害、壓迫、において、おど〳〵した不安な、なまぬるい生を送るより、刹那も強く彈力ある、激しい生き方を私は望ましいと思ふ。

私は、兩親を欺いた。すべての、私の周圍の人を僞つた。然しそれを私は、罪惡だとか何とか考へたくない。

私が激した時……父母に對して激しく何か憤つた時……私は父や母が何だらう、血と肉を受けたばかした。私の兩親は、少しも、本當に私を愛してくれない、そして、私といふものを、認めてくれない。何時までも、赤ん坊のつもりで扱つてゐる。私にとつては、祖母や兩親は、師より友より、更に〳〵遠い人だとしか思へない。そして、私は何の權威もない、割に合はない、子の親に對する道德など考へたくない、實際私の親位、自分達の下らない、滿足を願ふ爲めに可愛いゝと、口癖のやうに云つてゐる、子を苦しめるといふ、矛盾した勝手なまねをする親は、ないだらう。

さう、思へば親なんか、何でもないと、いふ氣も出るけれども、矢張り目に見えぬ、何かの絆は、しつかり、親と、子といふ間を、つないでゐてその絆はどうしたつて、斷つ事は出來ないのだ。そして私は、たしかに父や母が私に對す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐよりも以上に、私は父や母を理解する事が出來ると思ふ。

一切を捨てゝ、傍見をせずたゞ一心に、忠實に、自己の道に進むといふ、さう云ふ、決心を絶えずゆるめないで引きしめてゐる、私の頭の中を幾度となく、私が兩親を欺いて、家を出て後に父母が襲はれる苦痛と家の中の暗い、不安な、空氣をもつて、抱く苦しい心持がうろつく。ああ、けれど恐らく私の兩親は、私がさういふ心持を抱く事など夢にも思つては吳れないだらう……そして、たゞ不孝な子とばかし憤るだらう。

「不足なう敎育も受けてゐながら、人並にしてゐれば幸福に暮せるものをどうして從順しくしてゐる事が出來ないのだらう」

と昨日も祖母が次の間でこぼしてゐた、私は默つて目をつぶつてゐた。

午後たあちやんが來た。ザボンを持つて……

私が五つになるまで守をして吳れた女だ。私の幼い記憶に殘つてゐる、たあちやんは赤い、うすい髮の毛をひきつめた銀杏返しに結つた、色の黑い目の細い、兩頰に靨のある忘れられないやうな、何處となくやさしみのある顏だつた。

十三の年にあつて、それつきり會はないでゐるうちに見違へるやうな奇麗な女になつてゐる。廿四とか云つてゐた。今まで直方(ナヲガタ)に奉公してゐたが、お嫁入の仕度に歸つて來たら丁度私が久しぶりに歸省してゐると聞いて早速來たのださうだ。私も何とはなしになつかしくうれしい氣がして日あたりのいゝ椽側に床を引つぱり出してその上に座つて話した。

私がナイフを出してもらつてザボンをむいてゐる間にも、祖母は、たあちやんをつかまへて、云はなくてもよささうな餘計な事まで聞いたり、話したりしてゐた。矢張り、自分の經驗をふりまはして、お嫁に行つてからの事をいろく注意を與へてゐるのだ。何處まで人の世話が燒き度いんだらう。ザボンはたあちやんの宅になるので奇麗な內紫だ。味はまたよくついてゐないけれども匂ひが馬鹿に高い。たあちやんは、私を時々見返りながら私の幼い時の話をはじめた。私はザボンをたべながら默つて、話を聞き聞き、頻りにおぼろ氣な記憶をたどり始めた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

この頃のやうな秋の暮れ方、燈ともし前の一時を私はきつと、たあちやんの脊に負はれる。そして海岸に行つた。私は小さい時から海が好きだつた。松原ぬけて砂丘の上にたつて、たあちやんは脊をゆすぶり乍ら、

椎ーのやーまゆーけばー

椎がポーロリポーロリとー

と透きとほるやうな聲で歌つて呉れた。

暮れ方のうるみを帶びた物しづかな低い波の音につれる子守歌がたまらなく悲しい。私はたあちやんの脊に顏をうづめてシク〳〵泣いた。そしてじーつと耳をすましては、歌を聞き思ひ出したやうに、泣き止んだり、また泣いたりした。たあちやんは、歌ひ〳〵サク〳〵砂丘を降りてまつしろな、きれいな藻の根を、青い藻の中からさがし出しては私の手に握らして呉れた。私は冷たいその根を嚙んでは甘酢つぱい汁を、チユウ〳〵音をさして吸ふた。さうしてたあちやんは椎の山を歌ひながら寒い海の風に吹かれて白い渚を行つたり來たりして背中をゆすつた。

五時近くたあちやんは私の髮を梳いて呉れたりして歸つた。後はまた寂しかつた。

九日――――

今日も仰向になつたまゝ胸の上に指を組み合はして天井を見つめたまゝ何おもふともなしに一日は暮れてしまつた。

晝間シヤブが松原で殺された事が誰からともなく家の者の耳に入つて來た。皆浮かぬ顏してゐる。

やさしい、おつとりした親しみを持つた眼と、深いフサ〳〵した美しい毛をもつた、老ひてはゐたが利巧な犬、可愛いゝ犬だつた。可なり引き締つた氣持ちでゐる私の目からもポロリ〳〵と涙が出る。

皆次の間で食事しながら犬の事で泣いたり笑つたりしてゐる。私はひとり突きはなされた者のやうな氣分でさびしく考へてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私はかうして獨りはなれて、なるべく周圍の何物も耳にしないでつとめて、自分ひとりの氣分をかばつて一日でいいさうした周圍に起る不快なくたらない紛紜（いざこざ）に耳をかさず心を動かさずに私は寂しい私自身を抱いて靜かに深くそして眞面目に何かを考へて見たい。せめて一日、靜かに心動かさずおなじ氣分で考へ續くる事が出來たら何か意味のあるものをつかむ事が出來るやうな氣が絶えずする。

黄昏の冷たい空氣が何處からともなくしみ込んで來て暫くの間に室一杯に漲ぎつて沈んだ、然し張を持つた私の氣分を一層深くきゆうと引きしめるやうだ。私はヒタと目を閉ぢた。かうした空氣の中にぢつと浸つていつまでかうした氣持ちでゐたい。…………

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白と淡紅の優しいコスモスを私は今邪見に捨てたんですの。

大粒の涙がぽたりぽたりと落ちて來ます。窓越に田と山と鰻の養魚池が嫌やでも眼に入る外方に眼を向け乍ら、私の眼が何にも見ない時、大粒の涙がぽたりぽたりと落ちて來ます。それが黒い塊が頭の中を混雑に下へ下へと落ちて行くその重さに、締め出されて出るとより云ひ樣のない涙なのです。

私は本を開きます。それより仕方がないのですから。そして一行二行三行と紙の上を辷て行く頭を漸次活字の中に活かした頃、又背後から何物かに追駈けられるのです。暖まつた座蒲團を蹴て私は庭に飛び出します。茶山花を摘んたり、長椅子に寢たり、池の鯉を驚かしたりして、それでも直に此處に戻ります。机の前に座る外私の居所は何處にもないのです。

机には今朝妹が挿して行た白と淡紅の嫋やかなコスモスが軟い葉の間にしなだれて少しの動きにも顫へて居ます。その優しい姿が怎麼氣分と堪らなく不似合ですから、今引抜いて捨てゝ了つたのです。寧ろ腫物の切口を思はせる樣な特入りのあくどい濃紅のダリヤでも眺めて居る方が相應しいでせう。

あの夜貴方は暗い重い遣瀬ない氣持でお歸りになつたのでせう。そして香水も吹かずに床の上に倒れた儘何時きても何時迄もお睡らなかつたのでせう。鳥の鳴く迄。さう思て私は悲しかつた。

彼れから私も空つぽになつた胸に只一つ殘つた手頼なさが、明るい電燈の光から部屋一面に散て行く寂寥を吸ひ集めて、總身をその中に浮かせ乍ら悄然り座て居ました。貴方の冷い床の中の涙も考へられたのです。そしてそれを如何する事も出來ない身を見廻して、がらんとした中に淋しい顏を撫で廻しました。

私は冷えて了たんです。いゝえ、元から冷いんでした。貴方の要求から當然起る害の立腹それさへ私には起らないち

やありませんか。要求を入れるのは無論、眞氣(むき)になつて罵るにも莫々しく嘲笑する事も出來ない程熱のない私が、自分にも情けないんですが、貴方には猶堪らなく濟まない氣がしてならないと思ふ程、私の心は順直なんです。

私は今何よりも熱と力とが戀しいんです。熱と力で驀進されたら！狂的？それで結構です。凡ての精力を全部内面に燃やして焚く火に、焦けて爛れて行く樣な熱狂的奮鬪の他人のサークルさへも飛び込めるものなら飛び込みたい。でなければ側からでもいゝ、見て居たい。斯ふ迄思ふ程欠陷だらけの空虛な自分に愛想が盡きました。煮え切らない、如何でもいゝ日許り續きます。一生息のある限り續くのかと思ふと堪へられません。氣の拔けたサイダーの樣な生活が。

戀ッ、怎麼人間に戀が出來るものでさか。

結婚、私は結婚の出來る程熱も執着も持て居ないんです。貴方は私を變た人だと被似るでせう？決して!!!私はあの頃の心持と少しも變りませんの。あの頃の私が第一大變に恠しいものだつたのです。私は何時迄も變れさうもない人間らしい。變りたくも。

本當に彼の頃の私と貴方は、只二人の都合のよい樣によい樣にと、二人で拵らへて居た貴方と私とでした樣ですのね。まだ貴方は彼の頃の私を戀をして居た女と思て被入るんでせうか。戀してゐた女だつたら彼時はあゝも立派に捨てられはしません。

「捨てる」貴方は怎麼言葉を見るお目を急いでお閉ぢになり乍ら背いた人間を憎いとお思ひになりませう。決して私は貴方を苦しめる爲に態々好で怎麼字を使ふのでは厶いませんの。只只私と云ふ者を有の儘貴方にお目に懸けたい許りに貴方の暗いおいの上にも一重雲を懸けて了ひましたのを悲しみます。酷く。

「斯うなると宛然貴方は意地ですね」

彼の時貴方は斯う被仰た。本當に意地でした。九分九厘迄意地でした。女だと思てと亢ぶつてる反抗心の中に何處に優しい愛性の閃めきがありませう。最後のお手紙が私の手に落ちた其の瞬間、太く張た喉から頭の心へジーンと飛び上た物の影のまた落付かない隙から、もう猶豫なく殘酷な復讐が頭を擡げたのでした。よく水瓜や麥湯を浸けた、無花果

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の葉が上一面被さつて居た、あのお宅の裏の堀井戸ね、私の死屍を吊るすにはいゝ處だと思ひました。お好でした芭蕉の浴衣、あれを着て、あの太い綱に絡まつて浮き上つた慘めな私の軀を何時迄も貴方の胸に燒き付けて、その冷い凄い慘ましい影に貴方が一生涯慄えて居たら、私は胸がすくたらうと思ひました。本當に。

　それを何故斷行が出來なかつたでせう。私は矢張り貴方を戀する事も憎む事も出來やしなかつたんです。相手を刺して自らも死ぬ、其麼とりつめた思でもきび〱する機會丈け――エヽ、その機會丈け――に打突かり乍ら運用する熱は貴方にも私にもなかつたとは、何て情けない事なんでせう。兩人の間の働きがそれに對しては餘り餘り役不足なんです。兩人ともあの時は立派な戀だと思て居ましたがね。それも貴方を自由にして居ると思つた――實はさう明確り意識しては無論居なかつたんですが――間こそ異性に對する特殊の羞恥とか血の動搖とかも、女らしく私を唆つたんです。そして私の何處にも立派な尊い犧牲的精神は溢て居ると思て居ました。何がッ、虚ッ、皆虚でした。

　貴方の戀が「如何する事も出來ない出來事」に負けた時、口惜しくも私の目は悲しいと云ふ綺麗な涙で頰を洗て吳れませんでした。口惜し涙の意地張り涙でこそ汚したでせうが。私は貴方の「如何する事も出來ない出來事」を私自身にも「如何する事も出來ない出來事として受入れる事が出來たら、本當に女らしい情火に貴方一人、只一人を包み込で、眞紅の色を息してもられた女たつたら、私は綺麗な綺麗な女でしたでせうね。

　と云た處で貴方は男並に、私は女並に、男を、女を、愛して居た迄の事、並なすです。さうでした。並でした。もう今の私は水平線の一處を行たり來たりして居られる程平ぢやないんです。外へ飛び出すか、內へ飛び込むか……兎に角此の足場を如何にかして踏み破らなくちや私は、私は、駄目なんです。もう。もう。

　然し妙でしたのね。戀を絕對視する事の出來なかつた貴方と、戀の報酬を當然豫期して居た私とに、よくもおたふくが甘酒に醉拂た樣な月日が續いたものですね。短い乍らも。今私は草を持たまゝ半刈られた田の面を上へ下へ飛び廻つてる赤蜻蛉を窓越しに眺め乍ら、其頃の色々の事を考へて見ました。

　貴方は追憶を手繰る處女の眼の光、頰の色を思出して下さいますッ？

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は堪りません。其頃他愛もなく嬉しがつたり恥かんたりした何も彼にもが、今は皆身慄ひする程嫌やな、汚された樣な、氣がしますんです。戀の追憶て怎麼ものぢやない筈、斷じて斷じてない筈です。殘酷でした。怎麼事を申て。許して下さい。あの入日の海をよく覺えて被入りませう。金色の波の中に飛魚が跳れましたのね。何處迄も蒼い〳〵水が周圍からそろ〳〵暈けて行く中を白い帆が二つ見へましたつけ。何處が近いか賭をして貴方も私も勝たないうちに何時か帆が見えなくなりましたのね。覺えて被入りますの。私の聲が綺麗でしたでせう。岩に片肘凭せて大きな體を長く橫にして被入た貴方の胸にぴつたり私の頰を載せて、私何を唱たか覺えて被入る? ローレーライがお好きでしたのね。あの磯が眼に見えませう?

「女の聲ていゝものだなあ」と被仰たお聲も聞えます。さう〳〵。あの時の綺麗な心地を思つては「虹の日」と呼で居ました。私は。

虹の日!!!

私はこのインキ壺を何處へでも叩付けたい程腹立たしい氣がします。

何が虹の日でせう。私は半巾で此の頰を強く強く拭きました今。怒て下さいますな。私は今泣いて居ます。貴方の胸に觸れた頰を拭いた半巾で確り眼を押さへて。淚が口に傳はつて、下顎をむづ〳〵喫ります。何となく貴方の熱い唇が思ひ出されて自分と唇を堅く嚙み占めました。

初めの頃の貴方のお手紙にはよく

「この次にお出での時ベーゼをなして下さいね」と云ふ樣な事が書いてありましたのね。貴方の一生を語て居る樣で寂しいんです。接吻に迄豫告する程要心深い貴方の生活は、靜かに曲線を畫き作ら墓迄續くのでせう。銅の針金の樣に。無難でせうが寂しいでせう。寂しいからこそ浮世の何でもを形丈けにでも求めて被入た。接吻も、抱擁も、戀の前形丈け。形さして味はうと努力なすつた貴方の戀が如何な結末を告けたでせう。

「意氣地なしッ」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は貴方の横面にこの言葉をぴしやりと打突けて上げたい。始終上げたかつたのでした。遠から。けれども私も意氣地なしでした。さうした後の貴方のお顔色を見乍らオホヽヽと笑ふ丈けの勇氣は矢張り私にはないんですからね。貴方と同じ位寂しい青い顔をして絶言を繰返す情けない私を躁らすが關の山だつて事も承知して居ます。

何しろあやふやでした。自然あゝ云ふ結果に終る價値がなかつたんです。戀なんて云ふのも勿體ない、單に異性間の有振れた情の動きに過ぎなかつたんです。

私はあんなものを再び繰返す勇氣を持ちません。　して。貴方と私とではあれ以上の事は出來やしないんです。火が熖が欲しい…………

貴方は我儘だと仰被るでせう。ね屹度！

私共を我儘にして下さるのは皆男の仕事なのです。女は本當に柔順を好みます。絶對服從を好みます。割腹して果てた將軍の後に續いた夫人を思ふて女の誰もは屹度泣きます。

熔けて流れて凝て輝いたお星様の樣な心が、胸が、お出でお出でをしたない、如何したつて死の海にも笑て沈むのが女です。女には死と云ふ事が或場合には其麼切迫詰た破目ぢやないのですから。對象に刻した自らを——對象其物を——一生かす爲には女は屹度如何にもします。それにノラを呼ばしたり、マグダを叫ばしたり、勇者の男は屯麼仕事外女に爲してくれないとは情けない事です。兎に角結婚は屹度何方かを我儘にして了ひます。

「ふと飽かはふと別れんと戯の樣にもあらす云ひし君故」怎麼不安に釣られて行かない以上は。獨だと云ふ安心が我儘の上に勢力を敷くのでせう。人間も打算的な動物です。

遂に貴方には破裂が來ました。早晩來べき筈の第二の破裂が。

私は彼時呆れましたのです。

一日小さい鋏で緋縮緬を切り小間裂いて琴の爪袋と猫の首輪とを拵らへて居た、桃割の可愛い娘さんを選た貴方の度胸のよさには、實際呆れました。その頃よく貴方のお頭が明い光の下で可愛い友禪の膝を枕にして被入たと云ふ事も知

つて居たのですもの私は。

頑しい貴方にして隨分思ひ切た皮肉な遣り方でしたのね。假令お菊ちやんはお姑さんのお嫁たつたにしろ、緋縮緬のお細工物ちや如何貴方のこのどす黑い濁たお顏に我慢が出來ませう。小作の前に爪を露く男の本性もお菊ちやんの前に顯して、彼の綺麗な眞白な頰に、冷い泪の幾條を畫いたのかと思ふと、無闇に貴方のアイロニカルだつた遣口が憎くなります。そのうちにお姑さん丈けのお嫁さんは一日〱とお嫁さんでも奥さんでもなくなつて、只只お母さんにされちまひました。私は泣きたくなります。そのお母さんはとうと歸らない家に子を置いて、子と離れて親の膝に歸たと云ふんですもの。お母さんと云ふ名がないお菊ちやんが。

其麼時でもお菊ちやんは矢張り爪袋抱き乍ら、お白粉を泪で洗て居たんでせうか。順しく云はれる儘に又二度でも三度でも綿帽子を被ると云ふんでせうか。可愛さうな人。

可愛さうな人。あゝ貴方もね、貴方もね。可愛さうな人ですのね。お菊ちやんの泪を見た時凝乎して破入れた貴方ちやないんですから。さうした弱い慈悲心が遂と、お菊ちやんをお母さんに直して了ひました。可愛い貴方の御子が歩く迄も母と云ふ名を負はせて。それ處か、貴方の酷い慈悲心はさうして置けたら一生でもと思たのでせう。

其後の貴方には矢張りあつけない日が續く外仕方がなかつたでせうね。これからも。

もう何も彼にも結末が貴方には付いて了た樣に思はれます。

私達も外面的にもお別れの時が參りました。貴方の鉛色のお顏と、獨ぼつちの生活とを思ふと熱い〱泪が溢れるのです、貴方があれから此れ、此れから彼れと疣んで行ける方でない丈私は堪らない。貴方の懷に縋り付いて思ふ樣泣きたいで。もう〱駄目です。駄目なんです。怎麼氣分が何時迄續くものですか。ほんの一瞬間です。直後から云はう樣ない寂しさが湧いて來ます。

辛い悲しい淋しい日が續きます。肉の枯れない間は續くのでせう。銀のナイフと光つたピストルが欲しいにはまたまだ堪えられます。灰色の糸の錯雜つた胸をスパリと斷つ事も出來ない程もつれた時は、只淋しいものですねえ。紐

獸の檻の中に飛込んでずたずたに引裂かれる自分の肉と血を見た時淋しさから離れられさうです。只何にかしら巨人の手に締められたい。こんなに私を苦ます物は何になんでせう。

戀をするなら五色の綱で絡まれて、死の階を下され乍ら息もつかずに笑て居る様な戀がしたい。てなければ憎て憎て此の世のあらん限り憎み拔かれたい。この髮を一本一本なつた繩で柔い此の體を燃の薪に縛て、焔に焦げて行く肉の塊をまた足りないと様に傍からウフフフと笑ひ乍ら見て居て呉れる……

貴方は悪魔に私を愛されますか。憎まれますか。両方（ごちら）も貴方には出來ません。私にも。

兩人の用のない交際も今日で終ります。私は私の少年の面白い血の動揺を見て少しは生甲斐とある氣持をしたいと思ひます。

可愛い少年は囚はれた身を抱いて身悶えして居ります。今日も私の膝で泣いて行きました。あの清い玉の様な泪が涸れて、慄へる手に萎を、白刃を求める迄私は靜に見て居られます。何も知らない私のS子は。

「Mさんのお顔は段々蒼くなりますね。如何したんでせう」と眞黒の眼を曇らせて居ります

「あゝ酷（むご）い」時には私も斯う叫ぶのです。Mの歸つた後の座蒲團を抱き乍ら泣いて泣いて、頭の割れる程泣く事もありますが、それで居てその泪の裏には小さい勝利が潛で居るのです。そしてMの手に移た時のS子、君主の前の優しい奴隷を考へると男の涙がもつともつと見たいのです。一つには勇者のMを見る時は私の藝術的氣分の慘ましく崩れる時なのですから。

私は今Mの涙、Mの苦悶、Mの悲痛を見て人らしい氣に生きて居ります。

貴方の是れからは如何なつて行くでせう。流石に涙です。

是れでお別します。是れで、是れで。

ぼさり、ぼさりと紙の上に涙が光てます。私は泣きはしませんのに。左様なら。

（完）

十一月十四日

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

□岩野清子氏の小説も久しぶりで出す筈だつたのがとうとう間に合はなかつた。新年號にはそのかはりいゝお作をのせられることゝ思ふ。この頃の研究會には同氏の丸髷姿が目立つて居る。序ながら申上げて置くが研究會は一時からではなくて三時半から五時半迄です。

□昨年の九月創刊以來「棚」といふ小説の豫告をしてゐる中野さんはまたとうとう今月も書かなかつた。又來年まで「棚」を引張つて行く氣なのかしら。一年も二年も一つものをぢつと心にもちつゞけて行くことには到底尋常人の眞似られぬことだと同人の誰かが感心してゐた。けれどいよいよ新年號には書くとの事。

□「新しい女」といふ言葉はいつ何處から流行り出したのか知らないけれど近來新聞や雑誌で盛に御愛嬌を見せてゐるものらしい。どうやら新聞屋さん始め雑誌屋さんがこしらへあげた一種の風船玉のやうだ。そして青鞜社の同人達は幸にも其風船玉に擬せられてやすやすと方々におかつてゐるやうだ。私共もこの「新しい女」といふ有名なものに對する我々の意見や感想を新年號に大に書いて見やうぢやないかと言ふやうな話も今編輯室でもち上つて居る。お正月のことでもあり、ちと浮氣もたまにはよからう。いや浮氣ぢやない。我々はジヤアナリストの見解から全く離れて、眞面目に眞面目に、所謂新しい女や、眞の新しい女に就いて考へて見たいのだ。

□新年號には皆な本氣な、その人一杯な作品ばかりをのせたいと思つてゐる。

□來春早々、創刊以來の青鞜の小説十五六を撰んで「青鞜小説集」と題するものとホオの散文詩集とを出す筈。

□それから社員の岡本かの子氏の歌集も出る。これは大分年の内に出來ませう。全部木版で極めてこつた、うつくしいもの。

□其他原田琴子さんの歌集も圓窓よりも其内に出る筈。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

□今月の編輯室は中々賑かだつた。伊藤野枝さんと、らいてうとゐる處へ、小林さんと尾竹さんがくる。日がくれると、小笠原さんと長曾我部さんと某氏とがくる。一番おくれて東雲堂の西村さんが來る。圓窓の部屋はらいてうのあの沈みきつた、頭ばかり兩手で押へてゐる近頃にも似ず、しばらくの間うきうきした空氣が一杯になつてゐた。小林さんは下手な會合より餘程上出來たなんて言つてゐた。

□この日ほんとなら尾竹さんは圓窓の家に來られない筈だつたのだ。どうかして落付けやう、あの恐ろしい氣分の急變を靜めやうといふらいてうの窮した考から繪をかかなければ、製作が一つ出來上つた時でなければ決して逢はないといふことに相談の上できめた。で、今とりかゝつてゐる製作が出來上らなければそしてそれを持つて行かなければ圓窓の部屋の閾は踏めない筈だつたのを、とうとう製作半で勝ちやんと一緒に上り込んで仕舞つたのだつた。そして其夜遲く歸ると又興奮して折角かきかけた繪を破つて仕舞つたんだとか。

□らいてうも夏以來もう半年も紅吉の凄しく尖つた神經になやまされて昨今はめつきり瘠せて見える。舊約の神は嫉妬の神である。新約の神は愛の神である。キリストは嫉妬の神に參じて愛の神を見た。嫉妬と愛と、もとより一つ。一は破壞し、一は建設するなどと原稿の端に書いては棒をひいてゐる。

□此頃は只ぢつと机の前に座つて讀書ばかりしてゐて、「二十世紀」もとうと見に行かない。誰も居ない處で勉强がしたい、勉强がしたいといつてゐる。こんな時、新聞記者でも、雜誌記者でも訪問したつて皆んな玄關拂いの憂目に逢ふにきまつてゐるから今年中位はさういふ種類の人は圓窓の家へは誰れも行かない方が賢いことだと思ふ。

□文祥堂の二階も今度は景氣のいい高つ調子の尾竹さんの聲がきこえなくなつたので淋しい。やせたらいてうや勝ちやんの肩を、めつきり冬になつてしまつた寒い風がふく……。もうお正月が近くなつた。

□お正月は嬉しいもんだ。いくつになつても……町の小娘がさかんに羽子をついてゐるのを見ると胸がわくわくする。青鞜社の人々が往來で追羽子をしたらずいぶん問題になるだらうなんて勝ちやんは言つてゐる。

□紅吉が、皆が自分に同情してくれるやうに「編輯室より」に自分のことを書いてくれと勝ちやんにたのんだとらいて

うに話すと、らいてうは苦笑してゐた。「いかにも紅吉らしい」と言つたやうに。

「御徒士町のあのつんつんした葉の並木はなんと言ふ木たらうと同人はしきりに氣にしてゐるが、誰も知らない。親切な人がいつか敎へてくれるたらうとこゝにかいて置く。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

□寄贈書籍紹介

「青空」 吉江孤雁氏著、中興館書店（定價四拾五錢）

内容は落葉、伐木、牽牛の眼、月光、切株、雪、山頂の雲、洪水、秋と靜肅等、諸雜誌に掲載せられた諸作を集められたもの、自然を描く作家の數ふるほどもない今の文壇に氏のやうにいつも自然に對して緊張した心をもつてゐられる人のあるのはうれしい。女流作家にも一人や二人は自然に興味を有つてゐる人もあつてほしいと思ふ。

「大思想家の人生觀」 ルドルフ、オイケン原著

安倍能成譯 東亞堂發行（定價參圓五拾錢）

菊判七百頁餘の大きなもの。卷頭には原著者がケーベル博士に送られた寫眞からとつた肖像や、特にこの日本譯に寄せられた序文の手蹟ものつてゐる。其他ケーベル博士や、波多野精一氏の序もある、譯者の自序によると、最初同氏が譯さうかと言ふやうな氣があつたのを、同氏の親友の魚住氏か譯すことになつたので氏は其企圖を思ひ斷つた。ところが魚住氏は其事業に手をつけない中に逝かれたので、同氏は又この飜譯をいよ〳〵するやうな廻合せになつたのださうだ。同氏は言ふ、「今後何年友より生き延びるかはしらぬけれども少くとも自分の生きてゐる間は此の飜譯は自分に取つて思出多き友の短き然し充實した生活を偲ふ一記念である。此事か愈々出來る時、先つ捧ぐべき者は魚住の靈前より外にない」と。

本書の内容は希臘時代から現代に及んでゐる。全體を希臘時代、基督教、近世の三篇に分ち、更に第一篇をクランツク時代の思想家、クラシツク以後の古代の二章、以下數節に、第二篇は近世總論、新世界の建造啓蒙哲學の崩解及新道程の探求、以下數節に分けて論してある。終りに索引あり、附錄として本書中に引用した詩句がのつてゐる。我々は譯者のかう言ふ事業に、價値ある苦心に感謝し、眞面目な讀者の一人でも多いことを希望すると共に、特に婦人もこの種の書物に興味をもたれることを切望しておく。らいてうが讀後の感想といつたやうなものを本月號に書く筈だつたが、近來色々の問題が頭の中で混亂して、大分疲勞してゐる爲め間に合はなかつた。新年號に讓ることにする。

「誘惑」 江馬修著 下町社 發行

江馬氏がスバル等に掲載された小説を集めたもの。總て六號活字で、誠に美しい、感じのいゝ本である。

□寄贈雜誌

三田文學	スバル	早稻田文學	新潮
黑燿	黑猫（創刊）	朱欒	モザイック
詩歌	歌舞伎	新人	六合雜誌
スタヂオ	みづゑ	現代の洋畫	ヒュウザン（創刊）
アラヽギ	心の花	層雲	俳味
奇蹟	流星	藝文	ホトヽギス
學燈	劇と詩	新女界	以上

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新年號豫告

小說

岩野清
藤岡一枝
田村俊
木内錠
小笠原貞
尾島菊
人見直

飜譯

野上彌生
増田初
榊纓

詩

與謝野晶
茅野雅

評論

らいてう

歌

原田琴
武山英
三ヶ島葭
白雨

新らしき女

上野葉
荒木郁
林千歳
岩野清
長曾我部菊
加藤みどり
白雨
らいてう
中野初
與謝野晶
田村俊

■小川未明著■

北國の鴉より

それを一個畸形なる北國の蠻人が人間生活の根柢を攫まうとして苦悶し行く心の歴史として味ふ時は現代の作家の何人からも味ふ事の出來ない嚴肅なる或る一種の人間生活の意義を痛感し得られると思ふ

（御風氏、未明論より）

新刊發賣

菊半截形美本
紙數四百餘頁
挿畫コロタイプ
定價六十錢
送料六錢

東京市淺草區下平右衛門町
岡村書店
振替東京一九〇六五番
電話下谷四〇二〇番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美術界に於ける唯一の寶典

第貳卷 日本美術年鑑

四六判洋布裝釘背金字入
紙數 千百頁
石版刷圖表四葉
寫眞版十七葉挿入
正價金貳圓九拾錢
小包送料内地拾貳錢

目次

第一章、明治四十四年美術界一年史　第二章、美術展覽會　第三章、官職員　第四章、美術審査委員會　第五章、教育機關　第六章、美術館　第七章、古社寺保存及國寶　第八章、團體　第九章、美術界の人物　第十章、美術に關する言論　第十一章、美術に關する出版物　第十二章、統計及圖表　別篇　日本美術家人名

日本美術年鑑は昨年其第一卷を出すや時世の要求に適應したる有益の良書と認られ江湖の賞讃を蒙り幾もなくして再版を發行したものにして本書第二卷は猶ほ前卷の遺漏を補ゐ編纂上多大の苦心を經て玆に之を公にするを得たり、即ち本卷は昨年四十四年末を基點とし美術界の有らゆる方面に渉り精密なる調査を遂げ紛糾錯綜せる事項を系統的に分類し一瞥の下に斯界の現勢を知悉せしむる事を期す卷首美術界一年史以下文展及び其他諸種展覽會の景況成績官私立の美術學校及研究所の沿革現狀校則等各國に散在せる各美術團體の消息美術館の現狀、國寶に關する事項美術界人物の傳記美術に關する言論及出版物參考諸法令統計表類一件の微と雖も遺す所なく**日本美術家人名錄**は畫家彫刻家彫金家蒔繪家圖案家建築家其他寫眞等に至る迄各種の美術工藝家美術批評家を以て名ある學者網羅し殊に篇中記者等現存有名の人士三千二百名の出所略傳を掲ぐる等精確比なく此篇のみにても一部完全の現今美術家人名辭書と謂ふべく、附も數字的説明のみ多く興味索然たる諸他の年鑑類と選を異にし一度之を繙けば何人と雖も坐らにして斯界の事情に精通するを得べし、今や美術の事漸く世に重きをなすの際籍を斯界に措くものは勿論苟も美術に志ある人々に取りて本書の必要なるは言を須たず、若し未だ本書を手にせられざる人あらんか一見驚嘆に値せん事必せり冀くば速に購求ありて浩大の便益を享けよ。

東京市本郷區湯島切通二十五番地
電話下谷二四八三番
振替口座一八[illegible]〇六番

發兌 畫報社

青鞜

原稿用紙

■大判 [illegible]色刷 二十字十行百枚綴

■大判 [illegible] 同 上

■小判 [illegible]色刷 同 上

定價各一册十五錢 送費一册四錢

[illegible]

[illegible]

發賣所

東京市京橋區京橋際

東雲堂書店

電話京橋一六三九

振替東京五六一四

青鞜叢書刊行

■岡本かの子著　和田英作畫
歌集　かろきねたみ　歌双紙第一篇
定價金二十五錢　郵稅金二錢

■二十氏執筆　長沼智恵裝幀
青鞜小說集　近刊

■青鞜同人譯　尾竹紅吉裝幀
ポオ散文詩集　近刊

■らいてう著　尾竹紅吉裝幀
圓窓より　近刊

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目　（振替貯金東京五六一四）　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

純文藝雜誌

朱欒

第二年第十二號

十二月號

定價二十五錢　送費二錢

詩歌

郊外の人に　高村光太郎
深きこころ　長田秀雄
光の種（譯詩）　佐藤春夫
こどものあたま　長尾豐
デッサン　松村牧雄
藍色の蟇　吉川惣一郎
にらの花　栗田朱鳥
埃及に於ける（ヘロドタス外二篇アンドリユ、ランク）　増野三良
青褪めたる馬（ヴアレーリー・ブリユーソフ）　葉村滋
搖籃（朱欒詠草）　古市あきら外數名
さざめ雪　北原白秋

感想及評論

品川日記抄　故大貫品川
サロメの記憶　ヽ｜下生
書の思　北原白秋

劇及小說

チツイアンの死（ホフマンスタール）　倉田啓明
ある手紙　西村陽吉

散文詩

港（シヤール・ボードレエル）　無名氏
白猫　北原白秋
ふさぎの蟲　同人

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五六一四）　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

純文藝雜誌

黒耀

コクエウ

十二月號

定價金二十五錢
郵税二錢

溫室より（小説）……松本泰
斷章五つ（詩）……尾竹紅吉
夕空遠く（小説）……西村陽吉
譏笑（詩）……木下茂
人足の一人がせし盗み（小説）……田中落穗
行ける處まで（歌）……金澤種美
うす月夜（小説）……五百歌左二郎
きづな（歌）……西出朝風
日暮れまで（小説）……中野穰
鵲（譯詩）……佐藤春夫
鄙の悲劇（飜譯）……小澤愛圀
譯詩……永井荷風
A Reader's Complaint.（評論）……野口米次郎
小篇三（隨筆）……陽吉
僧房雜錄（隨筆）……久米淳
編輯室にて（隨筆）……同人

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目　振替東京五六一四番　東雲堂

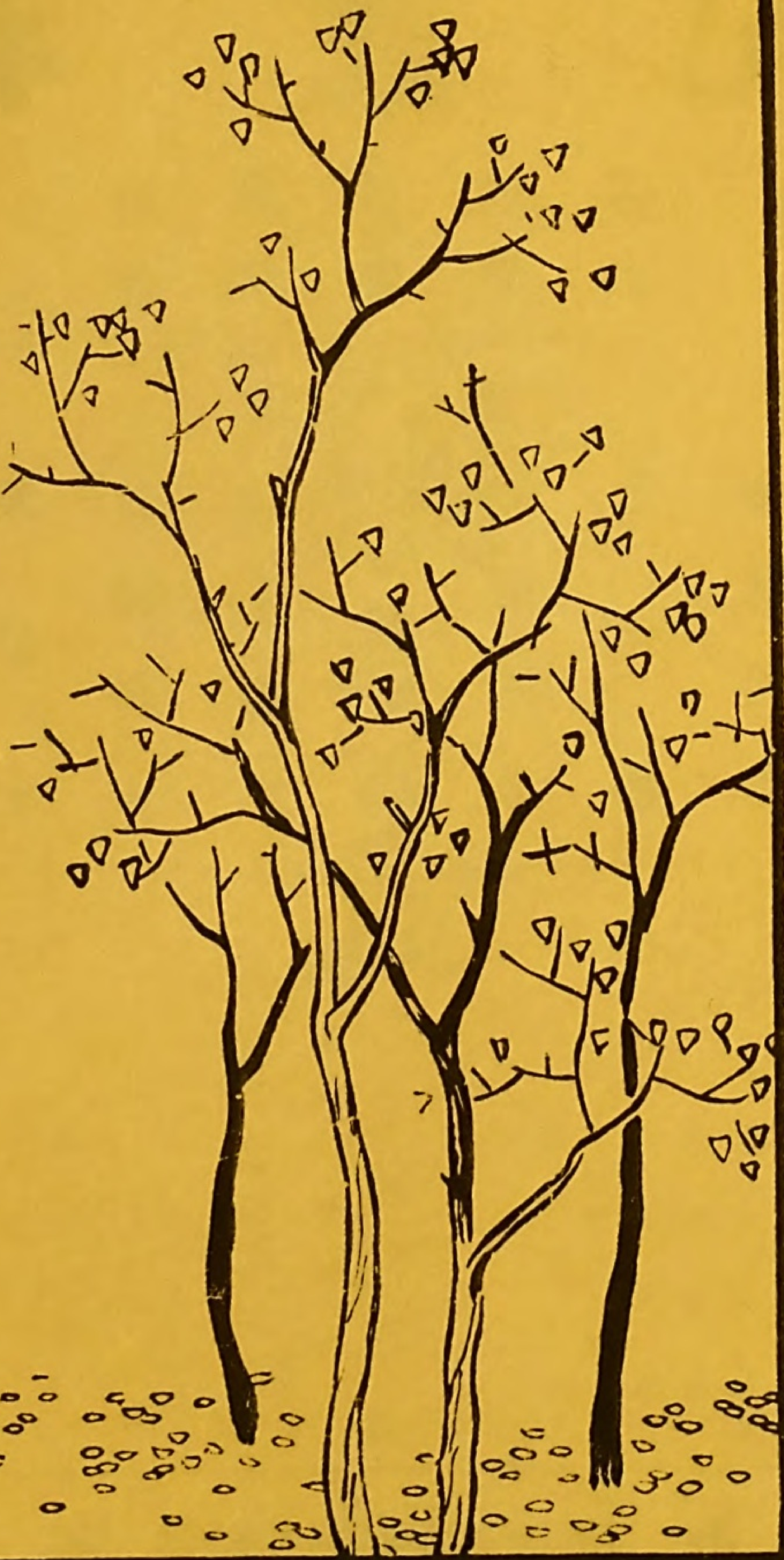
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

歌集

死か藝術か

新裝發賣

東京
京橋際
東雲堂



若山牧水氏著

內容

手術刀
落葉と自殺
かなしき岬

裝幀

四六判總クロース美本
定價金七十錢
送費金八錢

吉井勇著

水荘記

山脇信徳畵
齋藤與里畵

内容

- 水荘記
- 苦痛の谷
- 山上哀話
- 戯曲「無智の序」
- 湘南秘事
- 七尺牘
- 海郷異志

新刊發賣

奇しく凄艶なる七篇の物語を收む。

菊版頗美本
本文黑青二度刷
挿畵二葉
定價壹圓
郵税八錢

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五六一五番）　東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

北原白秋氏著及畫

本文朱黒二度刷……歌[illegible]百[illegible]首及歌論
挿畫凸版數十種……装幀淡紫と白の瀟洒
定價金八十五錢……送費金六錢

KIRI-NO-HANA.

桐の花

抒情歌集

凡てこれ快くして悲しき氏が内心の息づかひ
ご清新なる感觸の記録なり今や新装成る。

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替東京五六一四番） 東雲堂

發行所 東京市京橋區南傳馬町 振替東京五六二四 東雲堂

求むるこころ手にふれ[illegible]よし遠く行けり[illegible]靜にうか[illegible]落ちたる塀に[illegible]爲は、悲しけれどもちからあるものなれば 煙や赤き南國の月光や、香氣ある太陽や、これらは詩無[illegible]に[illegible]心を養ふものなれ この詩集の如き僅に[illegible]心に培かひたるもの[illegible]芽生に過ぎず。

阪本繁二郎畫

三木露風著

四六判頗美本
定價八十五錢
郵稅六錢

詩集

白き手の獵人

近刊

詩壇に
EPOCH
を
劃せる
書

抒情小曲集
思ひ出
北原白秋著

第六版發賣

小形朱黒二度刷美本
定價金九十錢
送費金六錢

歌集
別離
若山牧水著

第四版發賣

小形著者肖像入美本
定價金七十錢
送費金六錢

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目 振替東京五六一四番 東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東雲堂書店出版書

歌集	桐の花	北原白秋	定價金八十五錢	送費金六錢
歌集	水莊記	吉井勇	定價金壹圓	送費金八錢
歌集	死か藝術か	若山牧水	定價金七十錢	送費金六錢
歌集	黄昏に	土岐哀果	定價金五十錢	送費金六錢
歌集	別離	若山牧水	定價金七十錢	送費金六錢
歌集	收穫	前田夕暮	定價金七十錢	送費金六錢
歌集	一握の砂	石川啄木	定價金六十錢	送費金六錢
歌集	悲しき玩具	石川啄木	定價金五十錢	送費金六錢
詩集	思ひ出	北原白秋	定價金九十錢	送費金六錢
詩集	邪宗門	北原白秋	定價金八十五錢	送費金六錢
詩集	霧	河井醉茗	定價金五十五錢	送費金六錢
詩集	路傍の花	川路柳虹	定價金五十錢	送費金六錢
詩集	夜の葉	森川葵村	定價金六十錢	送費金六錢
戯曲集	午後三時	吉井勇	定價金壹圓	送費金八錢
戯曲集	和泉屋染物店	木下杢太郎	定價金壹圓	送費金八錢
論集	演劇新聲	小山内薫	定價金八十錢	送費金八錢
評傳	哲人カアペンター	石川三四郎	定價金八十錢	送費金八錢

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地
電話京橋一六三九振替東京五六一四

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

▲第十二卷▲第一號

每月一回一日發行

美術新報

▶十二月一日發行◀

特價三十錢　稅一錢五厘

時言

洋畫界の新機運　森田龜之輔

泰西現代巨匠傳叢　十九……　石井柏亭

歐洲美術巡禮　町田曲江

印度雜話　丸山晚霞

歸朝後の感想

繪畫

風景　ウアーペル筆　原色版

ポンペーの壁畫　ナポリ博物館藏　網目版

プラマ教徒の少女　ベサール筆　原色版

ヴェニスの二婦人　カルパッチオ筆　アートタイプ

ベナール夫人の像　ベナール筆　網目版

文展出品者親睦會出席者紀念撮影

ウアーペル作　岩村透

拓殖博覽會の一日　安堵久左

藝苑茶談　迂仙生撰

新建築印象記　五　三井代[illegible]所　黑田鵬心

晚秋の諸展覽會　浦仙生

時報

發行所　東京本鄉區湯島切通坂　畫報社　電話下谷二四八三番　振替東京一八一〇六番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第四卷 第十二號

スバル

價三拾錢 郵稅二錢

初秋ノ頃（小説） 小寺健吉
さらば（小説） 竹友藻風
死ノ勝利（小説） 石川戲庵譯
警察ノ子（小説） 長島豊太郎
田舍（小説） 森鷗外
篝火舟（小説） 江口水郷
幸吉（小説） 五百歌左二郎
尼院（歌） 與謝野晶子
散文 吉井勇
詩 茅野蕭々
詩 長沼重隆
同時代ノ私語（詩） 佐藤春雄
詩 室生犀星
笛（詩） 堀口大學
佛燈ノ影（詩） 千葉莫哀
何ノ爲ニ書クカ？ 與謝野寛
掠鳥通信 無名氏
事務室ヨリ（紹介） 平出修

東京神田區北神保町二 昴發行所 電話本局四二六四番

木枯や西方の山皆尖る　桑花

十二月號

享樂主義と俳句（卷頭語）
芭蕉（一）……沼波瓊音
鳴雪先生に答ふ……久保天隨
梅室の句（承前）……丁生
青木繁氏の俳句……記者
秋……蓮池翠影
六樹園と其狂歌……川島風骨
ふるきもたへ……宮島五丈原
蕪村と漢學（其九）……久保天隨
氣まぐれの筆……吉丸萬古刀庵
俳句……諸家
五年前……中根庸

俳味

每月一回一日發行

定價
一部金拾五錢
郵稅壹錢

半年分前金
郵稅共金八拾六錢

一年分前金
郵稅共金壹圓六拾八錢

發行所
東京市本郷區西片町十番地
俳味社
振替口座 東京三四三四番

要目

京より奈良へ……田中松露
蚯の聲……船山豐
俳味地方俳壇
燒栗……（懸賞俳句發表）
白豚集……酒井野梅選
我が見たる俳蹟……（懸賞文章發表）
私解芭蕉の發句（十五）……沼波瓊音
俳交欄
洒落氣（小說）……川口梧葉
口繪
俳句の自分と自分の俳句と……庫裡山門生
枯尾花の句（曉臺）……（寫眞版）

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百五十號（十二月一日發行）

毎月一回一日發行
一冊二十五錢
郵税一錢五厘

前金郵税共
六冊壹圓五十錢
十二冊貳圓八拾錢

戯曲「ギヨッツ」（ギヨオテ）……鷗外譯
野天劇場の意義……廣政法天
舊劇保存に就いて……巖谷小波
俳優の書ける自叙傳……伊原靑々園
默阿彌著作解題……河叶新水
新難波戰記……岡本綺堂
「名工柿右衛門」……榎本破笠
歌舞伎座の「柿右衛門」……和田魚平
「二十世紀」と「願の石」……松居松葉
荒尾讓介について……高田實
明治座旗上げの出し物……伊井蓉峰
「サロメ」を見て……佐々木信綱
横濱と東京で見たる「サロメ」……芹影女
「サロメ」を見てから……中谷德太郎
ウイルキー・座の沙翁劇……仲木貞一
「キヤンデータ」を見て……市川又彦
「ヘッダ」を見て……廣政法天
本郷座の「荒尾讓介」……孔雀船
市村座と歌舞伎座……巽の女
第三回舞踊研究會……いも
活動寫眞化せる「巴里の秘密」……旭光
十一月の戯曲……花菱生
當世芝居協議……幸堂得知
大小劇見物記（靑々園、春浦）
脚本「ピグマリオン」（シユミツトボン）……小野秀雄譯

東京本郷切通坂町 書報社内
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三番
振替口座一八一〇六番

月刊美術雜誌

第九號 現代の洋畫 十二月號

每月一回一日發行

挿畫

□風景（原色寫眞版刷）……齋藤豐作
□羊飼ひ（仝）……ヂオヴアンニ、セガンチニ
□別府港の朝（仝）……南薰造
□アリユードエの夏（仝）……石井柏亭
□風景（仝）……正宗得三郎
□秋の野（仝）……川上冷花
□デツサン（凸版）……ミレー
□幽靈の出る家（二色刷）……川上冷花
其他ハンブルヒ美術館出品畫の中三點、セガンチニの作品三點を寫眞版として挿入す

記事

□ヂラヴアンニ、セガンチニ……木村章
□ハンブルヒ美術館……石井柏亭
□泰西美術界概觀……長谷川天溪
□手帳から……森田龜之助
□繪……川上冷花
□斷篇……松村巽
□未完成なる繪畫の美……石川明
□戶外寫生に就て……石川欽一郎
□北國雜感……鈴花生
□カラチウブ……みどり
□十一月の美術界……
□寄書……裸體に就て……私の我儘……其他

發行所 東京市牛込區水道町五三 振替東京四三七三番 日本洋畫協會出版部

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヒユウザン

毎月一回
一日發行

第二號

一部二十五錢
郵税一錢五厘

挿畫

踊り子(色刷)……Edgar Degas
肖像(寫眞版)……萬鐵五郎
植物圖(同)……硲伊之助
風景(同)……川上凉花
黑き帽子の自畫像(同)……清宮彬
未定(木版)……岡本歸一
表紙(坐せる女のデッサン)……松村巽

目次

Edgar Degas(Graefe)……木村莊八
大塚より(散文)……川上凉花
未定……高村光太郎
感想二篇……松村巽
F. K.(詩)……三並花弟
旅に出る前(散文)……川村信雄
自然の言葉……松村巽
太郎さん(小話)……三並花弟
阿部能成君へ……岸田劉生
中學生(小說)……木村莊八
未定……齋藤與里
舊友に、他二三……

發行所 東京市牛込區水道町五三 振替口座東京四三七三番 日本洋畫協會出版部

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第一年
第八號

モザイク

定價一冊
貳拾五錢

拾二月號內容

□ラ・フォスタン（小説ゴンクウル）……武林無想庵譯
□みゝから（戯曲）……井田絃聲
□落葉の頃（小説）……藤井伯民
□二三の感じたる事（感想）……太田善男
□七日七夜物語（小説）……水島爾保布
□星空の下（小説）……西田廻瀾
□卓上より（批評）……モザイク同人
□表紙繪……五十嵐禎夫
□裏繪……水島爾保布

東京下谷區中根岸六九　モザイク社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

△「群盲」に現はれたる象徴主義（飜譯） ヘンリーローズ

△「二十世紀」に現れたるショウの戀愛觀（評論） 市川又彦

△選ばれたる本年の藝術（批評） 仝人

純文藝雜誌

劇と詩

第二十七號
十二月一日發行
定價金三十錢

短歌募集

僧房の歌（歌） 秋庭俊彦
創造の世界（詩） 白鳥省吾
蝕（小説） 小澤久雄
イエツの思ひ出（感想） 仲田勝之助
斷層上の樹木（詩） 西宮藤朝
孤獨（小説） 小杉寛
存在（詩） 若山牧水
未練（詩） 津田青楓
人形岩（戯曲） 川瀬喜
日本のカブキ劇（評論） ベンコングトン夫人
ひなげしの花（歌） 上村千草

錆びた太陽（詩） 鎌野白夜
温泉場の秋（歌） 松岡白虹
四人（小説） 伊東六郎
ゆく秋の顔（歌） 若山牧水選
冷たき手（歌） 土岐哀果選
編輯の後（隨筆） 人見東明
秋と犬（表紙繪） 岸田劉生
街頭にて（扉繪） 木村荘八
夜氣車の女客（仝） 松村巽
（二十世紀）の舞臺面（寫眞）……

發行所 東京小石川區雜司ヶ谷町 劇と詩社

大賣捌 東京堂 東海堂 北隆館 至誠堂 盛春堂 上田屋 良明堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心の花

第十六巻　第十二號

萬葉集講義　佐佐木信綱
古今集の修辭　次田潤
民謠と自然　秋元蘆風
鬱金香（その二）　吳野潮音
佐渡か島　姉崎正治
赤き實　加藤順三
觀艦式の日　武井大助
今日にして　益田松子
ジュリエット姫　森律子
ハムレットを觀て　原口愛子

十二月一日發行　定價三十錢

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部

振替東京四三〇〇番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月刊美術雑誌

水彩畫を描く人は勿論愛好せらるゝ諸君は本誌を坐右に欠く可からず

みづゑは本邦最古にして且唯一の水彩畫研究專門雜誌なり

みづゑ

第九十四

十一月三日發兌

送料共金廿五錢

□南英ドーキングの河岸（水彩畫原色版）　丸山晩霞
□伊太利フローレンスフヰソン丘の秋（同）　同
□南英ブーリの古村（同）　同
□南英ボートンの春（同）　同
□アンバレーの古寺（水彩畫寫眞版）　同
□ローマ附近（同）　同

□藝術と晩霞氏　戸張孤雁
□滯歐中の紀行と感想　丸山晩霞
□倫敦後記　石井柏亭
□感想　高木背水
□日本水彩畫會横濱支部展覽會を見て　大野以文
□横濱支部の方々へ　矢代幸雄
□丸山先生の個人展覽會　赤城泰舒

發行所　東京小石川關口駒井町三　振替口座東京三九六三番　春鳥會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白樺

第參卷第拾貳號

拾貳月號

拾貳月一日發行

●定價參拾錢●送料一錢五厘●半ヶ年前金壹圓七拾錢●一ヶ年同三圓卅錢●

目次

▲Aの手紙(二つ)……武者小路實篤
▲狂者の詩……高村光太郎
▲熱病患者……園池公致
▲谷に來て(短歌)……吉井勇
▲雜感……武者小路實篤
▲短歌……日下諗
▲製作……小泉鐵
▲蝙蝠の如く(小說)……有島壬生馬
▲手紙(小說)……里見弴
▲六號雜感……長與善郎
▲三井甲之助君に……無車

挿畫

▲自畫像……カー[illegible]ト・ロ[illegible]
▲同……ホー[illegible]
▲同……ホー[illegible]
▲同……ヴンセント・バン・ゴーホ
▲自畫カリチユール……[illegible]ノ・ロートレツク

發行所　東京麴町區麴町二ノ二　振替東京二〇九一四番　洛陽堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■畏くも宮内省御買上の光榮を蒙り天下無類！

内外各博覽會ニ於テ

名譽賞牌受領

みやけ油

登録商標

東京人形町通

木村三宅堂

すき油　びんつけ油

家庭重寶

粉末石鹸

（本誌愛讀者に限り一割引）

發賣元

東京市日本橋區人形町通リ

三宅堂本舗

電話浪花六二〇・振替口座八七五一

■村井弦齊先生の賞賛の辭に曰く

日本一の純良髮油にして常にお用ゐになれば、第一髮のさきをからしません、まッ黑に光澤麗しく髮がしなやかになり、何時も洗髮のやうに、さらさらとして粘らず、殊に産後又は病後髮が拔ける場合等に用ゐて髮の發育を速かにしますから以前よりも長くふさふさした洗い髮となります、又頭の病にかゝる事なく、のぼせをしづめ、ふけを取り老年になりても白髮になること遲しと。

昭和44年 3月15日発行　【第3回配本】

青 鞜 第 2 巻 （第2分冊）

編著者	平塚 らいてう
発行者	藤原 正人
発行所	(株)明治文献
印 刷	正明印刷
製 本	(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
V.2
no.12

50 126CO XL 111
04/09 30016-160 UA
HFGroup

Digitized by Google

University of Colorado at Boulder
U18304 6704624
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可 第二巻

ASN
PL
756
W6
S45
v.2
no.7-12
1912

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER